

亜細亜大学
学術文化紀要

ISSN 2436-9411 (オンライン)

第40号(2022)

[論 文]

日本語学習者の作文における主題内容説明文の誤用分析 … 清 水 淳 1
— I-JAS の「エッセイ」を対象として —

スペイン語音声教育の教材としての歌の利用 …… 高 澤 美由紀 23
— 再音節化に焦点をあてて —

[研究ノート]

アンドレス・ベリョ『カステーリャ語文法』
日本語訳(6) …… 土 屋 亮 37

亜細亜大学「総合学術文化学会」規程集 …… 57

総合学術文化学会

2022年9月刊行 PDF 版

Journal of the Society for General Academic and Cultural Research

No. 40 2022

CONTENTS

[Articles]

- Error Analysis of “(Abstract Noun) *wa* + Noun Predicate Sentence”
by Japanese-Language Learners Jun Shimizu 1
— An Analysis based on *International Corpus of Japanese*
as a Second Language —

- Use of Spanish Songs as Materials for Pronunciation Teaching
..... Miyuki Takasawa 23
— With Focus on Resyllabification —

[Research Note]

- Translation in Japanese of Andrés Bello’s
Gramática de la lengua castellana: Part 6 Ryo Tsuchiya 37

- Rules and Guidelines of the Society
for General Academic and Cultural Research 57

The Society for General Academic and Cultural Research
ASIA UNIVERSITY
TOKYO, JAPAN

亜細亜大学

学術文化紀要

第 40 号

2022 年

総合学術文化学会

日本語学習者の作文における主題内容説明文の誤用分析

— I-JAS の「エッセイ」を対象として —

清 水 淳

Error analysis of “(Abstract Noun) wa + Noun Predicate Sentence” by Japanese-Language Learners

— An Analysis based on *International Corpus of Japanese as a Second Language* —

Jun Shimizu

Abstract

The present article aims at showing the actual usage of “(abstract noun) was + noun predicate sentence” in the learner’s writing. When Japanese language learners use this sentence pattern, they make grammatical errors of various types, including grammatical errors in the correspondence between subjects and predicates. Therefore, developing a method of teaching appropriate usage to the learners will be demanded. However, there is no previous research that has focused on this sentence pattern using a large-scale corpus. Thus, the author examines its usage by looking at Essay of the International Corpus of Japanese as a Second Language (I-JAS). The author counts the appearance frequency of grammatical errors of this sentence pattern and classifies these types of errors.

1. はじめに

以下の例のように、抽象名詞（句）を主題とし、その具体的な内容を述部で説明する構文がある。

(1a) 私の夢は英語の教師です。

(1b) 私の夢は英語を教えることです。

(1c) 私が将来やりたいこと／のは英語の教師です。

(1d) 私が将来やりたいこと／のは英語を教えることです。

本稿では、(1a) ～ (1d) のような構文的特徴を持つ文型を「主題内容説明文」と呼ぶ。この構文では、述部は名詞述語文でなければならないわけだが、日本語教師の経験上、この構文にかかわる (1b') のような誤用が多く見られる。

(1b') *私の夢は英語を教えます。

砂川 (2019)、小口・山田 (2021) などの研究からも、(1b') のタイプの誤用は学習者の作文の中に散見される誤用であることがわかる。ただし、これらの調査においては、対象とする作文データの数と、そこから抽出されるサンプルが少数であるため、実際にこの種の誤用が典型的によく現れる誤用であるかどうかは、さらに大きい規模のコーパスで検証する必要があると考えられる。また、主題内容説明文については、(1b') のような誤用例のほかにも、実際には、様々なタイプがあると考えられる。以下の (2) (3) は、本稿の分析対象とする『多言語母語の日本語学習者コーパス』から抽出した例である (〈 〉は調査協力者 ID を示す)。

(2) 家庭料理の長所はヘルシな料理だと話すことができる。〈KKD29〉

(3) しかし、注意すべきのはそれを主食のように食べてはいけないのである。〈KKR06〉

(2) は、構造的には (1a) のタイプで、主題名詞に対して説明部分が名詞述部となっており形式的には問題がなさそうである。ただ、述部の内容に不完全さがあるように感じられる。誤用を修正するとすれば、「家庭料理の長所はヘルシーさだと…」または「家庭料理の長所はヘルシーだということだと…」となるだろう。(3) は、述部の名詞化が「こと」ではなく

「の」で行われている誤りである。節を名詞化する場合、「こと」と「の」の両方が可能であるが、主題内容説明文の述部においては、「こと」を使用しなければならない。このように、学習者が、主題を立ててその内容を述部で説明しようとする際、(1b')のような誤用例以外のタイプがあることが観察できる。この点からも、先行研究よりもさらに大きな規模のコーパスを用いた誤用分析が必要であろうと考えられる。

そこで、本稿では、『多言語母語の日本語学習者コーパス』(以下、I-JAS)における作文データを対象コーパスとし、学習者が産出した主題内容説明文を分析し、学習者が産出する誤用のタイプとその出現頻度を明らかにしたいと考える。

2. 主題内容説明文

2.1 主題内容説明文という呼称について

本稿では、(1a)～(1d)のように、主題とする抽象名詞(句)の具体的な内容を述部(名詞述語文)で解説する文を「主題内容説明文」と呼ぶ。従来、国語教育の分野では、「抽象名詞主題文¹⁾」という呼称があるが、抽象名詞を主題とする文は、「私の夢はかなわなかった。」や「私の夢は将来必ず実現する。」などのように、述部で主題の内容を説明するのではなく、主題について「それがどうなるのか」「それをどうするのか」という事象叙述²⁾のタイプもありえる。したがって、本稿では、それらと「抽象名詞主題の内容を述部で説明する」構文とを区別する意味で、「主題内容説明文」と呼称することとする。また、日本語教育の分野では、小口(2017)の研究に見られる「名詞述語文『(抽象・形式名詞)は～ことです。』」という呼称もあるが、主題の内容を述部で説明する文には、述部に形式名詞が現れない(1a)(1c)のような文もある。このことから、本稿では、「名詞述語文『(抽象・形式名詞)は～ことです。』」という呼称は用いず、(1a)～(1d)を包括する概念として主題内容説明文と呼ぶこととする。

2.2 主題となる抽象名詞について

主題内容説明文の主題部分は、2種類の構造が考えられる。一つは、(1ab)のように抽象名詞そのもの(「夢」)を用いる方法、もう一つは、(1cd)のように形式名詞「こと」「の」を使った抽象名詞句である(「やりたいこと／の」)。

抽象名詞については、寺村(1977)における「発話・思考の名詞」と「コトを表す名詞」がこれに当たると考えられる。これらの名詞は、いわゆる「³⁾外の関係」の連体修飾構文において、被修飾名詞になりうるためである。

(4) 私は政府の政策は間違っているという意見を持っている。

(5) 私には医者になる(という)夢がある。

(4)(5)の例は、いずれも二重下線部を被修飾名詞とし、その具体的内容を修飾節で説明する連体修飾構造を持った文である。そして、その被修飾名詞は、修飾部の述語と格関係を持たない、つまり「外の関係」となっている。寺村(1977:265)によれば、「外の関係」の連体修飾文は、修飾節が被修飾名詞の「内容」を述べるという点が特徴である。連体修飾構文において、「発話・思考の名詞」と「コトを表す名詞」が「外の関係」の構造をとりうるということは、主題内容説明文においてもこれらの名詞が多く使用されることになる。なぜなら、前述のとおり、主題内容説明文も、主題とする抽象名詞の具体的な「内容」を述部(名詞述語文)で解説する文であるためである。さらに、これらの名詞は、「外の関係」の連体修飾構文において、「という」が介在する((5)の例では任意)。「という」が付くということは、その名詞が説明すべき内容を伴うことを意味する。そのことから考えても、主題内容説明文の主題としてこれらの名詞が高頻度で使用されるということは当然の帰結だと言える。

2.3 主題内容説明文のバリエーション

主題となる抽象名詞句については、動詞または形容詞が形式名詞「こと／の」をとることで、様々なものが主題としてとりあげられることになる（「大切だと思うこと／のは……」「おもしろいことは／のは…」「重要なこと／のは…」など）。さらに、形式名詞については、実際には「こと／の」のほかにも、(6) (7) のように、「点」「ところ」も、主題部のみならず説明部にも付いて主題内容説明文を成立させる。そのため、これらも主題内容説明文として分析の対象とする。

- (6) ファストフードのいい点は注文した後、すぐ料理をもらえる早さと、家庭料理のような失敗する可能性はない点である。〈CCT19〉
- (7) ファストフードのもう一つの有利なところは家で作れないものなら、いつでも材料を買わずに食べることができるというところである。〈EUS02〉

また、主題となる名詞が「理由」「原因」などの場合、説明部を「から／ため」でも受けることができる (8) (9)。この場合も、主題の内容を説明部で解説する構造になっていると考えられるため、主題内容説明文として分析の対象とする。

- (8) 一人で食事をする人が増えている。その原因は仕事ばかりして忙しくて、時間がないからである。〈JJC21〉
- (9) 過去より現代には多くの人がファーストフードを食べる。その理由はファーストフードは言葉そのまま早いもので、忙しい現代人たちにアピールをしているためだ。〈KKD26〉

(10) のように前出の主題を代名詞で受ける場合がある。これについても、主題内容説明文として扱う。

- (10) しかし、ファーストフードにも短所がある。それは、体に悪い影響を与える点である。〈KKD25〉

3. 先行研究

主題内容説明文の誤用にかかわる先行研究として、砂川・清水（2017）、砂川（2019）、小口・山田（2021）などがある。

砂川・清水（2017）は、台湾の大学の日本語学習者（14名）の縦断的な作文コーパスを使用し、名詞述語文の使用実態を調査したものである。この調査の結果、名詞述語文の誤用 160 のうち、文末が主語と呼応する名詞述語になっていない誤用（ねじれ文）が 63（39.4%）と、名詞述語文における誤用の中で最多となっていることがわかった。上記の日本語学習者 14 名のうち、大学入学後に初めて日本語学習を開始した学習者に対象を絞った、砂川（2019）においても、名詞述語文の誤用 61 のうち、ねじれ文の誤用が 28（45.9%）で最多となっており、砂川・清水（2017）と同様の結果を得ている。これらの研究では、ねじれ文の誤用は学習の初期の段階から中上級にかけても断続的に見られる誤用であること、また、主題となる名詞が「原因」や「理由」の場合にねじれが起こりやすいという実態（ねじれ文の誤用 28 例のうち 8 例）などが報告されている。

また、小口・山田（2021）は、⁴⁾『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』に収録された「七夕」をテーマにした作文資料（60 編）を分析対象とし、主語と述語の対応関係の不具合の実態を調査しており、主題内容説明文はその一つとして分析されている。

主題内容説明文の誤用の実態を明らかにするという意味では、本研究はこれらの先行研究と目的を共にするが、本研究と先行研究との違いは、主題内容説明文の分析に特化している点である。砂川・清水（2017）、砂川（2019）の研究では、名詞述語文という形式的特徴に着目して、その範疇の中で現れる誤用の一つのタイプとして、主題内容説明文のねじれ文の誤用が記述されている。縦断的コーパスを対象として、名詞述語文の誤用に

どのようなものがあり、それがどの時期にどの程度現れるかということに主眼が置かれているため、学習者が主題内容説明文を産出する際の誤用のタイプを網羅的に分析したものではない。また、小口・山田（2021）における研究は、例えば、「こうして、織姫と牛飼いは無理やりに別れさせてしまいました」（述語語句の不備）や「しかし、これから、悲劇の始まってしまった」（主語助詞の誤用）など、主題内容説明文に限らず、広く「主述の対応関係の不具合」の使用実態を明らかにするものである。そのため、これについても、主題内容説明文に特化して、その使用実態を詳細に観察するものではなく、また、抽出された主題内容説明文の誤用例も非常に少なかった（4例）。

一方で、本研究は、対象とするコーパスをより大きい規模に広げ、主題内容説明文に焦点を当ててその使用実態に着目し、その誤用のタイプを網羅的に記述することを目的としている。この点において、本研究は、先行研究を発展させつつ、主題内容説明文の誤用の全体像を把握しようとするものであると言える。

4. 調査方法

4.1 分析対象

本研究では、I-JAS に収録されているデータのうち、「私たちの食生活：ファーストフードと家庭料理」（600 字程度）をテーマとして書かれた日本語学習者の作文データ（以下、「エッセイ」）を利用する。I-JAS には、発話データと作文データがあるが、発話データではミステイク（緊張等による一過性の誤り）がより多く含まれると考えられることから、それがより少ないと考えられる作文データを分析対象とする。また、作文データにはエッセイのほかに、ストーリーライティング（2 課題）とメール（3 課題）もあるが、前者は 4 コマまたは 5 コマの絵を見てストーリーを考えて作文するもの、後者は「依頼」「お願い」「断り」を要件としてメールを作成するもので、より具体的な場面性のある課題と言える。そのため、本稿の対

象とする主題内容説明文は現れにくいと考え、分析対象としないこととした。

エッセイは、調査協力者である学習者から、メール回収の方法で任意に提出されたものであり、総数は627編となる。I-JASの作文データは、国立国語研究所コーパス検索アプリケーション「中納言」のWebページからアクセスできるデータ配布サイトでダウンロードが可能である⁵⁾。公開されているフェイスシート（学習者情報）を確認の上、対象とするエッセイの母語別の内訳を以下に記す。

表1 エッセイの母語別の内訳

母語	中国語	英語	フランス語	ドイツ語	ハンガリー語	インドネシア語	韓国語	ロシア語	スペイン語	タイ語	ベトナム語	ポルトガル語	モンゴル語	計
作文数	151	44	17	41	36	46	98	38	46	52	52	5	1	627

4.2 分析方法

作文データの分析は、筆者（日本語母語者、20年以上の日本語教育経験あり）が行った。エッセイ627編を読み、主題内容説明文と判断できる文をすべて抽出し、それを正用と誤用とに分類した。誤用と判定した文をさらに詳細に分析し、誤用のタイプの分類を行った。なお、表記や活用、また主題名詞以外の部分の単なる語彙選択の誤りと考えられるものについては、今回の誤用分析の対象とはせずに分析した。例えば、以下のような例である。なお、(⇒)は筆者が行った修正を示す。

(11) 表記の誤り

ファーストフードのレストランに対する反論の一つはその食物が軒

昂（⇒健康）に悪いことだが…〈HHG59〉

(12) 活用の誤り

ファーストフードがだんだん普及になった理由はどんなレストランでも注文してからすぐ食べられて、大変便利（⇒便利だ）からである。

〈VVN12〉

(13) 語彙選択の誤り

そのため、ファーストフードの長所は安い値段だが、その短所は体に害をする（⇒与える）ことだ。〈RRS35〉

5. 分析結果

5.1 概要

まず、627 編のエッセイの中で、主題内容説明文の使用が 1 回以上認められたエッセイは 226 編であった。つまり、調査協力者 627 人のうち、226 人（36.0%）の学習者がエッセイにおいて主題内容説明文を使用したことになる。次に、226 編のエッセイの中から出現した全ての主題内容説明文を抽出した。「そのため、ファーストフードの長所は安い値段だが、その短所は体に害をすることだ。」（〈RRS35〉）のように、一つの文中に 2 つの主題内容説明文がある場合、それを 2 とカウントした。また、1 人の学習者が主題内容説明文を複数回使用するケースもあるため、当然、対象となる文はエッセイ数を上回る数となる。結果は以下ようになった。

表 2 エッセイに現れた主題内容説明文の出現数

	正用	誤用
出現数	165	186
割合	47.0%	53.0%
合計	351（100%）	

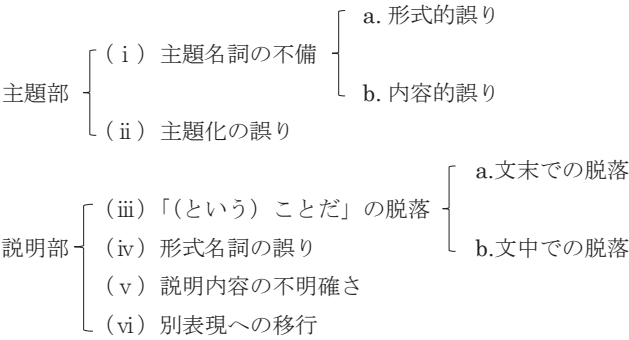
上表が示すとおり、主題内容説明文の総数は 351 例となった。そのうち、正用は 165 例で 47.0%、誤用は 186 例で 53.0%であった。当然ながら、主

題内容説明文の使用頻度には個人差があるが、ここではその比重については考慮に入れないこととする。

5.2 誤用のタイプ

誤用をタイプ化するにあたり、各誤用文を精査し、それがどのようなタイプの誤用と言えるのかを分析していった。その結果、抽象名詞をトピックとする「主題部」と、その主題部の内容を解説する「説明部」とに大きく分けて誤用を整理することとした。それぞれの内部で発生した誤用をさらにいくつかの種類に分け、以下のようにまとめた。

〈図 1〉 主題内容説明文の誤用の分類



以下の節で、図 1 で示したそれぞれのタイプの具体例を見ていく。なお、各タイプとは関係のない誤用箇所については、修正せずに掲載する。

5.2.1 主題部の誤用

(i) 主題名詞の不備 (16 例)

(i a) 形式的誤り (9 例)

主題とする名詞に誤った語を選択している例である。

(14) 最も大切な物は (⇒大切なのは) くいものが自分のライフスタイル

にどんな効果が有るかどうか、その責任をどのぐらいひきうけられて、結果を注目したほうがよいだろう。〈ENZ30〉

- (15) ファストフードのメリットについては、二つだと思います。一つはかかる時間が短いことです。二つは(⇒二つ目は)選択肢が多くて、さまざまなものが食べられることです。〈CCS09〉

(14) では「物」と「の／こと」との混同が見られる。説明部が具体的なモノではないため、「物」ではなく、形式名詞「の」（または「こと」）を使用する必要がある。(15) は、前文の「一つは」に続いて「二つは」としているが、「二つ目」としなければならない。「順序」や「列挙」を表す表現に関しては、(14) のように順序の表現を主題化しようとして形式的に誤るケースがあったり、一方で、形式的には「二つ目は…」というように主題名詞として不備はないものの、述部で「(という) ことだ」の脱落が起こったりなど、多くの誤用が見受けられた。「まず」「次に」などを使って副詞的表現で列挙していくのか、「一つ目は」「二つ目は」など主題名詞を立ててその内容を述部で説明していくのか、文章表現の技法としての主題内容説明文の指導の必要性が感じられた。

(i b) 内容的誤り (7 例)

主題とする名詞の意味が不十分であったり、前文の内容を正確に受けた主題となっていない例である。

- (16) 家での食事は(⇒家での食事の利点は) 栄養のある食品をバランスよく食べることだ。〈VVN06〉
- (17) そうかと言って家の料理はまだいろいろな利益がある。最初の理由(⇒一つ目のいい点は) は健康だ。〈GDE12〉

(16) (17) は形式上の問題というよりは、その名詞に内容的な不備が見られると考えられる。(16) では、単なる「食事」の内容ではなく、「食事

の利点」を説明する文脈であるため、主題名詞にさらなる明確さが求められる。(17)において、後文は前文の内容を受けて解説がなされる文であり、前文の「利益」(⇒利点)を受けた主題設定が必要であるが、「理由」という別の意味の名詞で受けている。指導上、主題内容を明確に表現したり、文脈上、適切な主題名詞を選択したりする意識付けが必要となるだろう。主題内容説明文の形式のみを作文させるような練習だけでは不十分であり、文脈における主題の設定までを意識させるような指導が必要となるだろう。

(ii) 主題化の誤り (4 例)

主題名詞自体に問題はないものの、主題化する際に助詞の選択を誤るケースである。ここでは、文脈がわかるよう、前後の文も含めて掲載する。

- (18) 例えばファーストフードの脂肪が蓄積量が多いかもしれない。果物や野菜が少ない場合があるだろう。一番大切なことが (⇒は)食品の衛生のことだと思う。人々の健康が重要からだ。〈JJE60〉
- (19) かていりょうりは時間がかかるでも、私の い見、(⇒意見は、)かていりょうりはあたいします。〈EUS38〉

(18) は、「は」で主語を主題化すべき文脈だが、「が」を用いることで「総記」の意味が生じ、主語に焦点があたる文となっているために不具合が生じている。(19) は単純に「は」が脱落した誤用例である。出現数は4例で、多くの学習者に見られる誤用とは考えられないが、起こりえる誤用として認知しておくべきだろう。

5.2.2 説明部の誤用

(iii) 「(という) ことだ」の脱落 (153 例)

主題部に対する説明部として、「(という) ことだ」を使用せず、述部の名詞化に失敗している例で、いわゆる「ねじれ文」である。先行研究にお

いても、この誤用の多さが指摘されているが、本調査の結果でも最多の出現数であった。「～と思う」などの引用節内や「～だろう」の命題部分において脱落する例が多く認められたため、ここでは、「文末での脱落」と「文中での脱落」とに分類して見ていく（例文の波線は主題の主要部を表す）。

(iii a) 文末での脱落（129 例）

文末にモダリティ表現や引用表現を伴わない文における誤用である。

- (20) 問題になるのはサイドメニューのフレンチフライとコーラを一緒
に食べるとき、高カロリー食品になる（⇒なることだ）。〈KKD50〉
- (21) しかし、短所は時間がたくさんかかるので、急ぐときにふさわし
くない（⇒ふさわしくないことだ）。〈VVN50〉
- (22) ファストフードのメリットは非常に便利です（⇒便利だということ
 です）。〈CCT33〉
- (23) 家の料理の味はいつも外食より淡いです。そして、デメリットは、
家の家庭料理の様式が様々あるんだが、（…中略…）成果は大体味
が普通なものです（⇒ものだという事です）。〈CCS26〉

課題とされたテーマの性質上、初級日本語教科書で多く見られる「夢」「趣味」などの主題名詞は出現せず、「メリット」「デメリット」「長所」「短所」などの名詞のほか、「大切な」「問題なの」などの名詞句の使用が多く見られる。そして、このことが誤用の発生につながっているのではないかと考えられる。⁶⁾初級での限られた名詞での文型導入だけでは不十分であり、抽象名詞（句）のバリエーションと主題内容説明文との関連性を確認させるような指導が必要になるのではと考えられる。

また、(20) ～ (23) は、それぞれ述部が動詞、イ形容詞、ナ形容詞、名詞の誤用例であるが、ここで特徴的であったのは、ナ形容詞と名詞の場合である。正用と誤用を含め、説明部にナ形容詞が使用された例は 28 例

であったが、そのうち正用は7例、誤用は21例であった。このことから、(22)のような文において「～便利だということだ」という形式を産出することの困難性がうかがえる。また、名詞を使った説明部には、単純に「名詞句+だ」の場合（例「メリットは値段の安さだ」）と、「名詞文+ということだ」の場合（例「A国とB国の違いは主食が米だということだ」）がある。後者のような文の出現数は全体で11例であったが、正用は(24)(25)の2例のみで、9例は(23)のような誤用であることがわかった。説明部の終了部が名詞であることから、重ねて「ことだ」を用いる必要はないと判断され、「ということだ」の脱落につながったものと考えられる。説明部の述部の品詞に着目させ、様々な品詞を使用しての指導が必要であることが示唆される。

(24) 大事なことは、「食生活」の本質は、生きるための栄養分の供給と
いうことです。〈KKR08〉

(25) 私が言いたいことは、「ファーストフードもメニューの一種」とい
うことである。〈KKR30〉

(iiib) 文中での脱落 (24例)

引用節や命題部分の最後に「(という) ことだ」を挿入する必要がある
文での誤用である。

(26) ファーストフードの良いところは美味しくて、早くて、安くて、
どこでも見つかる (⇒見つかることだ) と言われている。〈HHG52〉

(27) 一番大切なのは外食の料理は自分の健康に悪影響がある (⇒ある
ことだ) と思います。〈CCT40〉

(28) 一方、家庭食という家で作る料理が減ってきた理由はあまり時間
がないとか 作り方がわからないとかから、外食で食べればしよ
うがないと思う人が大勢いる (⇒いること) だろう。〈TTH10〉

「(という) ことだ」の脱落の誤用の中で、「と言われる」「と思う」「だろう」のような表現を伴った際の誤用が23例あった((iii)の誤用中14.9%)。そのうち、16例が「と思う」を伴う文での誤用であった。これは単純に「と思う」の使用頻度の高さによるものだと思われる。

一方、このタイプの文で正用となった例を見てみると、12例であった。つまり、このタイプの文は35例(23例+12例)出現し、そのうち、誤用は23例(65.7%)であったのに対し、正用は12例(34.3%)ということで、誤用率が比較的高いことがわった。付加的に文末表現を加えることで、「ことだ」で説明部の述部を整える意識が薄れることが誤用の多さにつながっているのではなかと予想できる。

(iv) 形式名詞の誤り (6例)

名詞化の「⁷⁾の」を主題内容説明文の述部に使用する誤りである。

(29) またリフレッシュさせるに一番いい方法は栄養バランスがとれた食事をするの(⇒こと)ではないか。〈KKR45〉

(30) その理由は、当世の会社員たちは仕事に忙しくて、毎晩自分で料理をする暇がないの(⇒こと)だろう。〈GAT41〉

初級における文法指導では、「こと」と「の」は名詞化という共通の機能を持つものとして指導される。このことを一般化し、学習者が(29)(30)のような誤用をおかすのは当然のことと言える。主題内容説明文の導入に際し、「(抽象名詞)は～ことだ」という指導だけでは不十分であり、「⁸⁾の」が誤りとなることを明示的に指導する必要性が示唆されよう。

(v) 説明内容の不明確さ (7例)

主題部と説明部の内容的な対応という観点から、説明部の内容が不明瞭な例である。

- (31) 家庭料理のもう一つの長所は家族と一緒にご飯を食べる時間 (⇒
時間が持てること) である。〈KKR07〉
- (32) 特にファーストフードは作るのも食べるのもあまり時間がかから
ないから、消費される。これには、様々な理由がある。(…中略…)
もう一つの理由は、社会の中で女性の変化しつつある役割 (⇒女
性の役割の変化) だろう。〈TTR53〉

いずれの例も、説明部が名詞述部になっており、形式的には問題はない。
ただ、その内容を見てみると、(31) のように、「家族と一緒にご飯を食べ
る時間」がどうなることが「長所」なのかははっきりしていなかったり、
(32) のように、名詞句内の主要部「役割」が主題「理由」と対応せずに、
説明内容が不明瞭になったりする例が見られる。このタイプの誤用につい
て、明らかに説明部が不明確と判断できたもののみを誤用と判定し、7 例
を抽出したが、実は判断に迷うものについては誤用から外して判定を行っ
ている。例えば、以下のような例である。

- (33) ファストフードのいいところの一つはその値段 (⇒値段の安さ?)
です。〈HHG12〉
- (34) 一方、家庭内で料理して、家族で食卓を囲んで食事できる家庭料
理は、多少時間がかかりますが、栄養バランスの管理がしやすい
です。それから、一番大切なメリットは、家庭教育 (⇒家庭教育に
つながること?) です。〈CCT54〉

(33) (34) のような例は、高い論理性が求められる文章内では、意味の
曖昧さが生じないよう、(⇒) で示したような修正例が必要だと考えられ
るが、この種のエッセイのようなジャンルでは、表現技法の一種として許
容され、修正が不要なようにも思われるため、今回の誤用の対象とはして
いない。ただし、このような例は 31 あり、また、(1a) (1c) の例のように、

説明部で「(という) ことだ」を使用しない名詞述部の場合がほとんどである。決して稀なケースとは言えないため、説明部の明確さということで、指導のポイントの一つとなる点だと考えられる。

(vi) 別表現への移行 (3 例)

説明部が、主題名詞の内容説明のみで終止するのではなく、さらに発展的に叙述する誤りである。

(35) ファストフードの悪い点は、健康上の問題だけではなく、内向的な人になって、不幸になることも悪い点の一つだ (⇒ことだ) と思う。〈TTR50〉

(36) 一番大切なのは家族と一緒に過ごす時間はなにによりです (⇒である)。〈CCM48〉

(37) また、ファストフードの大きな特徴は効率を重視することもある (⇒である)。〈KKR21〉

(35) (36) では、主題名詞の内容説明があるものの、その説明部に「～は悪い点の一つだ」、「～はなにによりだ」という構文が加えられている。また、(37) も主題内容説明文に存在表現「～もある」が付加され、結果として別の表現へ移行している。すなわち、このタイプは、主題内容説明文と他の構文が混在している誤用とも言える。

以上、ここまで説明してきた誤用のタイプと出現数を表にまとめる。

表3 各誤用のタイプの出現数と出現率

誤用の タイプ	主題部			説明部				
	(i) 主題名詞の 不備	(ii) 主題化 の誤り	(iii) 「(という) ことだ」 の脱落	(iv) 形式名 詞の誤り	(v) 説明内 容の不明確さ	(vi) 別表現 への移行		
	a.形式的	b.内容的		a. 文末	b. 文中			
出現数 (計190)	9	7	4	129	25	6	7	3
出現率1 (全体)	2.6%	2.0%	1.1%	36.8%	7.1%	1.7%	2.0%	0.9%
出現率2 (誤用)	4.7%	3.7%	2.1%	67.9%	13.2%	3.2%	3.7%	1.6%

※出現数の合計は190となるが、これは、一つの主題内容説明文の中に複数のタイプの誤用が見られるケースがあるため、表2の誤用文の総数(186)と一致しない。

※出現率1は、正用・誤用含めたすべての主題内容説明文351に対する割合を表す。

※出現率2は、出現した全誤用数(190)に対する割合を表す。

※誤用のタイプがはっきりしないものが1例あり、分析対象とはしてない。⁹⁾

6. おわりに

本稿では、I-JASで公開されている作文データ「エッセイ」を対象コーパスとして、主題内容説明文に焦点を当て、その使用の実態を調査した。誤用文を抽出・精査し、(i) 主題名詞の不備(a. 形式的誤り、b. 内容的誤り)、(ii) 主題化の誤り、(iii) 「(という) ことだ」の脱落(a. 文末での脱落、b. 文中での脱落)、(iv) 形式名詞の誤り、(v) 説明内容の不明確さ、(vi) 別表現への移行といった誤用のタイプ化を行った。先行研究よりも大きい規模で、誤用の多くの部分を(iii) 「(という) ことだ」の脱落が占めていることが確認された。また、出現数は低いながら、その他のバリエーションがあることも確認できた。

一般的な誤用分析の目的は、①どのような誤用があるのか明らかにし、②誤用をおかす原因をつきとめ、③それを指導に役立てることだが、本研究は①の段階に貢献するものであると考える。これを基礎的なデータとし

た今後の分析の発展性について、まず、母語別の分析が必要だと考えられる。主題内容説明文の使用に関して、母語別で出現数に差があるのか、また、母語によって出現する誤用のタイプには何らかの傾向が見られるのかなど、それぞれの学習者の母語の違いに着目した誤用分析が必要だと考えられる。また、今回の分析は、学習者のレベルは考慮に入っていない。今後、レベル別での誤用のタイプや傾向が明らかにできれば、レベルに応じた指導を検討する上での参考となると考えられる。

※本研究は、国立国語研究所のプロジェクトによる成果『多言語母語の日本語学習者の横断コーパス：I-JAS』を利用して行われたものである。

注

- 1) 安部・橋本(2014)
- 2) 事象叙述は、「雷が落ちた」のように「いつ、どこで」の問いを発することのできるタイプの叙述である(益岡 1987: 21)。
- 3) 「さんまを焼く男」(←男がさんまを焼く)のように、述語(「焼く」)に対する補語(「男」)が連体修飾節の被修飾部になるような修飾関係を「内の関係」という。一方、「さんまを焼く匂い」(←さんまを焼く／(ある)匂いがする)のように、文の外にあったものが被修飾部「匂い」になるような修飾関係を「外の関係」という(寺村 1977: 195-196)。
- 4) 小口・山田(2021)は、『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』に収録された「七夕」をテーマにした作文資料(60編)を分析の対象とし、主語と述語の対応関係の不具合の実態を調査している。主題内容説明文の誤用に関わり、この調査の成果の一つに、母語の干渉の可能性が示唆された点が挙げられる。例えば、「大事なことは、心がとてもやさしい人だ(⇒だということだ)」のような「述語形式の不備」の誤用が中国語母語話者の作文に4例見られ、このような誤用は韓国語母語話者の作文には見られなかったことから、この差が母語の影響から生じている可能性を示唆している。
- 5) 「エッセイ」はタグ付けがなされていないため、中納言での検索システムを使用した分析はできない。
- 6) 小口(2017)の研究では、日本語教科書での主題内容説明文の取り扱いが、「私の夢」や「趣味」に限定されているため、それ以外の抽象名詞を主題とし

た場合にねじれ文等の誤用が生じる可能性が示唆されている。また、砂川（2019：137-138）においても、ねじれ文で最も多いのが「原因」「理由」を主題とするタイプであるという分析結果が出ており、主題名詞による誤用の生じやすさに違いがあることが示唆されている。

- 7) 本稿では、益岡・田窪（1992：36）にしたがい、名詞節を作る「の」を、「こと」と同様に形式名詞として扱う。
- 8) この誤用にフォーカスを当てて解説するテキストもあり（友松・和栗 2007）、指導項目として意識されていることがうかがえる。
- 9) 以下の誤用は、そのタイプがはっきりせず、分析対象としていない。
「ファストフードと家庭料理の違いはどうして食べるか食べない理由がたくさんあります。」〈ENZ12〉

参考文献

- 安部朋世・橋本修（2014）「いわゆるモナリザ文に対する国語教育学・国語学の共同のアプローチ」『全国大学国語教育学会国語科教育研究：大会研究発表要旨集 126』、全国大学国語教育学会、pp.273-276
- 国立国語研究所『多言語母語の日本語学習者の横断コーパス：I-JAS』
- 小口悠紀子（2017）「初・中級教科書における名詞述語文『（抽象・形式名詞）は～ことです。』の扱い—学習者の作文に現れるねじれ文の問題から—」『日本語研究』37、首都大学東京／東京都立大学日本語・日本語教育研究会、pp.121-136
- 小口悠紀子・山田実樹（2021）「上級日本語学習者の作文に現れる『主述の対応関係の不具合』の実態—作文指導・学習の効率化を目指すための基礎研究—」『日本語／日本語教育研究 [12]』、ココ出版、pp.181-196
- 砂川有里子（2019）「名詞述語文の習得に関わるねじれ文と『は』『が』の誤用について—学習者の縦断的な作文コーパスの分析から—」、野田尚史、迫田久美子（2019）『学習者コーパスと日本語教育研究』、くろしお出版、pp.127-148
- 砂川有里子・清水由貴子（2017）「台湾の大学生による名詞述語文の習得状況—日本語学習者コーパス LARP at SCU と教科書の調査に基づいて」江田すみれ・堀恵子（編）『習ったはずなのに使えない文法』、くろしお出版、pp.1-24
- 寺村秀夫（1977）「連体修飾のシンタクスと意味—その3—」『日本語・日本文化』6号、大阪外国語大学留学生別科（寺村秀夫（1992）『寺村秀夫論文集Ⅰ—日本語文法編—』所収）
- 友松悦子・和栗雅子（2007）『中級日本語文法要点整理ポイント 20』、スリーエ

ーネットワーク

益岡隆志（1997）『新日本語文法選書 2 複文』、くろしお出版

益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法—改訂版—』、くろしお出版

スペイン語音声教育の教材としての歌の利用

— 再音節化に焦点をあてて —

高 澤 美由紀

Use of Spanish Songs as Materials for Pronunciation Teaching

— With Focus on Resyllabification —

Miyuki Takasawa

Abstract

This paper examines the relations between the lyrics and the melodies of famous Spanish songs, paying particular attention to resyllabification. The results show that the phonetic environment in which the synaloepha is most likely to occur is a combination consisting of an unstressed syllable of a function word and an unstressed syllable of a content word.

On the other hand, the resyllabification of “word-final consonant + word-initial vowel” is considered a phenomenon that always occurs within a phonic group. Therefore, songs may be the best learning material for Japanese learners of Spanish to make them aware of the connections between words and the phenomenon of resyllabification, which does not occur in Japanese.

1. 序

梨本（2021）は、英語の授業における歌を教材とした実践例を紹介し、歌を語学教材として用いる様々な側面からの利点を挙げている。その中で、スピーキングの面の利点は、発音、リズム、イントネーション、音の変化を歌の使用によって自然な形で身に付けられることにあるとしている。具体的には、歌と同じリズムでカウントをとりながら、リズムに合わせて音

読み、次の段階で歌を1行ずつ歌い、リピートしていくことにより、スムーズに歌えるようになるというものである。また、吉田（2014）は、「踊ってサンバ」を用いることにより、歌詞に含まれる動詞のテ形アクセントの記憶について、CDを歌って学ぶ「歌唱グループ」と歌詞の朗読CDを復唱して学ぶ「朗読グループ」とに分けて行ったテストにおいて、歌教材が語アクセントの記憶を促進させると考えられる結果が示されたとしている¹⁾。

一方で、高澤（2020）においても触れたように、スペイン語の授業等においてスペイン語の歌は用いられてきたものの、音声教育を目的として、歌を積極的に利用して作成されたテキストや体系的にスペイン語の歌の音声的特徴を特に音節の観点から取り上げた研究は、木村（2019, 2021）を除いてあまりない。木村（2021）では、木村（2019）でスペイン語独特のリズムとアクセントを日本人学習者に指導する目的で作曲した楽曲について、スペイン語においては頻繁に観察されるが、日本語には見られない再音節化と語間母音融合²⁾という2つの韻律的特徴について特に注意したと言及されている。スペイン語に観察されるこれらの韻律的特徴については、『日本人のためのスペイン語発音教本』（*Prácticas de fonética española para hablantes de japonés*, 2002: p.61）において、「1つの音声グループの中で2つの語にある母音が二重母音や三重母音になることがある。同じ母音が連続すると短縮される。」、「1つの音声グループにある語を超えて音節が作られることがある。前の語が子音で終わり、後の語が母音で始まるときそれらは連続して発音され1音節になる。」と記されている。また、Fernández *et al.*（2018）や Civit（2019）では、日本語母語話者へのスペイン語音声教育において、単語間の繋がりを意識させ、日本語の発話に生起することのない再音節化の現象を留意させることが必要である等、日本人スペイン語学習者への問題点が指摘されている。

以上のことに基づき、本稿では、スペイン語の学習教材として市販されている歌の教材を分析することによって、母音融合、及び再音節化について観察し、その教材をどのように用いることによって、日本人スペイン語

学習者に単語間の繋がりを意識させ、スペイン語のリズムを学ぶ一助とできるのかについて検討する。

2. 分析

2.1 目的

高澤（2020）の歌の分析では、スペイン語は英語と異なり、強勢の有無によって母音が変質することは通常なく、音節がほぼ等間隔で繰り返される、音節拍リズムに属することから、小節の1拍目に強勢音節を生起させなければならないという厳格な制限を受けないと推論された。また、音節タイプや強勢の有無が音価に影響を与えることがなく、1音節に2つ以上の音符が割り当てられる音節は、強勢の有無や音節タイプに関係なく、音調グループ末という生起環境によるものであるという結果も示された。さらに、高澤（2020, 2021）では、スペイン語のリズムと日本語のリズムが異なる一番大きな要因は母音融合であると推論された。以上の点を踏まえ、本稿では小節の1拍目に強勢音節のみが生起されることはないという推論の検証をするとともに、教材として用いられる歌が、1音節に1つの音符が割り当てられる傾向を示すか否か、母音融合や再音節化はどのような傾向を示すのかについて分析し、スペイン語の歌教材が音声教育、特に単語間の繋がりを意識させるための素材として適切なものであるかについて検討する。

2.2 分析方法

2.1の目的のために使用した資料は、学習者がスペイン語圏の文化に接したり、学習のモチベーションを高めたりするための歌の教材が必要であるという教員の要望により作成されたCD付の『歌』（CANCIONES, VOLUME I, 2002³⁾）の中から、子供の歌と反復記号を有する楽譜を除いた11曲を選択した。選択した歌は、スペイン語圏においてよく知られている、クリスマスキャロルやラブソング、地方の民謡など、伝統的な歌や現代の歌

である。作曲は1番の歌詞を主な対象として行うと考えられるため、音韻構造と楽譜構造との対応について、作曲者の言語直感が最も反映されるのは1番の歌詞であるとする窪田（1999）の基準に従い、分析の範囲は1番の歌詞のみとした。それぞれの歌について、1) アウフタクトの有無、2) 小節数、3) 1拍目が強勢音節となる小節数、4) 1音節は1音符に対応しているか、及び5) 母音融合や語末子音+語頭母音による再音節化はどのようにになっているかについて分析を行った。

3. 分析結果

3.1 アウフタクトの有無と1拍目に強勢音節が生起する確率

図3.1に実際の譜例を示す。図3.1は、スペインの全てのトゥナが持ち歌としている非常に有名な歌の1つである“Clavelitos”の楽譜の最初の部分である。この楽曲は、8分の6拍子の歌であるため、1小節は6拍から成るはずが、楽譜の最初の大きな○で囲んだ部分には1拍しかなく、不完全小節になっている⁶⁾。この最初の不完全小節をアウフタクトと言い、1拍目に強勢音節が生起するように、英語ではこのアウフタクトが用いられる。小さな○で囲んだ6か所は、強勢音節である。図が示すように、完全小節である4小節中最初の2小節と4小節目の1拍目は“ci”と“vel”、“bo”という強勢音節にそれぞれ割り当てられるが、3小節目では、強勢音節“vel”は2拍目に割り当てられている。

上述の譜例で示したアウフタクトの有無と1拍目に強勢音節が生起する割合をまとめたものが表3.1である。本稿で選択した歌11曲中10曲、つ



図3.1 “Clavelitos”の譜例

（『歌』 p.10 より引用した楽譜の一部を筆者が編集したものである）

表 3.1 各歌のアウトタクトの有無と 1 拍目に強勢音節が生起する確率

曲番号	曲名	アウトタクトの有無	小節数	1 拍目が強勢音節の小節数	1 拍目に強勢音節が生起する割合 (%)
1	Bamboleo	無	41	18	43.90
2	Campana sobre campana	無	20	10	50.00
3	Clavelitos	有	33	28	84.85
4	Cuando salí de Cuba	無	16	5	31.25
5	Eres alta y delgada	無	22	11	50.00
6	Gracias a la vida	無	21	11	52.38
7	Guantanamera	無	20	6	30.00
8	La bamba	無	27	8	29.63
9	Navidad, Navidad	無	16	9	56.25
10	Pero mira cómo beben	無	16	12	75.00
11	San Fermín	無	8	4	50.00
平均					50.30

まり、譜例として示した“Clavelitos”以外は完全小節で始まっている。また、1 拍目に強勢音節が生起する割合は、11 曲の平均は 50.30% を示し、生起率が比較的高いのは、“Clavelitos”の 84.85% とアンダルシア地方の伝統的なクリスマスキャロルである“Pero mira cómo beben”の 75.00% であり、その他は、約 50% の生起率を 6 曲が示し、残り 3 曲は 30% 前後の生起率を示す。つまり、今回選択した歌からも、高澤（2020）で推論されたように、スペイン語の歌は必ずしも小節の 1 拍目に強勢音節を生起させなければならないという英語のような厳格な制限は受けないことを補完する結果が示された。

3.2 母音融合による再音節化

図 3.2 は、2 つの語間母音融合の例を示した譜例である。“para”という語の縮約形である“pa”と後続する“eso”という単語の第 1 番目の音節である“e”を○で囲んだ“pa_e”の部分は、無強勢音節 /pa/ と強勢音

節 /e/ というように、それぞれ独立した音節に属するが、[pae] で同一の音節の一部になっている。同様に、“no_hay” の部分も、ともに強勢音節である /no/ と /ai/ がそれぞれ別の独立した音節に本来属するが、[noai] と同一の音節の一部になり、音節数はそれぞれ1つ減少することになる。これらが語間母音融合であるが、これら再音節化された音節にそれぞれ1つの音符が割り当てられている。

語間母音融合

図 3.2 “Clavelitos” の譜例

(『歌』 p.10 より引用した楽譜の一部を筆者が編集したものである)

表 3.2 1 音節に割り当てられる音符数の平均

曲番号	曲名	音節数	再音節化後の音節数	音符数	再音節化後の1音節に割り当てられる音符数の平均
1	Bamboleo	212	198	246	1.24
2	Campana sobre campana	87	84	96	1.14
3	Clavelitos	137	130	139	1.07
4	Cuando salí de Cuba	72	64	72	1.13
5	Eres alta y delgada	88	81	85	1.05
6	Gracias a la vida	65	61	78	1.28
7	Guantanamera	75	74	80	1.08
8	La bamba	103	98	112	1.14
9	Navidad, Navidad	102	97	106	1.09
10	Pero mira cómo beben	89	86	98	1.14
11	San Fermín	73	68	68	1.00
平均					1.12

表 3.2 は、各歌における、1 音節に割り当てられる音符数の平均を示したものである。平均は、1 音節当たり、1.12 音符が割り当てられることを示している。これは、高澤 (2020) において示されたように、音調グループ末という生起環境において、2 つ以上の音符が 1 音節に割り当てられることによるものと、図 3.2 の 4 小節目の “po-ca” の 2 番目の無強勢音節の /ka/ に割り当てられた 2 つの音符からも推論されるであろう。

また、表 3.3 は、母音融合の現象を曲ごとに抽出してまとめたものである。イタリック体の箇所が、母音融合によって同一の音節の一部となり、音節数を 1 つ減少させる箇所である。今回扱った曲において、語間母音融合が生起するであろう環境においては、全ての場合において語間母音融合が生起する結果となった。しかし、語内母音融合の現象は、伝統的なカンタブリアのトゥナでよく演奏される歌である、5 番目の “Eres alta y delgada” に唯一観察されたのみで、“sea” という音連鎖が、本来は母音分立として /se/ と /a/ というそれぞれ独立した音節として発音されるはずが、[sea] と同一音節の一部となり、1 つの音符が割り当てられている。この表では、観察された母音融合が、本来はどんな音節の組み合わせであったのかについて、「強勢音節＋強勢音節」、「無強勢音節＋強勢音節」、「強勢音節＋無強勢音節」、「無強勢音節＋無強勢音節」の 4 つに分類した。「強勢＋強勢」が 3 ケース、「無強勢＋強勢」が 11 ケース、「強勢＋無強勢」が 6 ケース、「無強勢＋無強勢」が 41 ケースそれぞれ観察された。さらに、表 3.4 は、一番多いケース数を示す「無強勢＋無強勢」のケースが、強勢語である内容語や無強勢語である機能語のどんな組み合わせによるものかについて、「内容語＋内容語」、「内容語＋機能語」、「機能語＋内容語」、「機能語＋機能語」の 4 つに分類したものである。「内容語＋内容語」が 8 ケース、「内容語＋機能語」が 8 ケース、「機能語＋内容語」が 17 ケース、「機能語＋機能語」が 8 ケースそれぞれ観察された。つまり、無強勢語である機能語の無強勢音節と強勢語である内容語の無強勢音節の組み合わせが、母音融合が生じしやすい音声環境である傾向が示された。

表 3.3 母音融合による再音節化
(丸括弧の中の数字は、2 回以上の生起回数を表す)

曲番号	強勢 + 強勢	無強勢 + 強勢	強勢 + 無強勢	無強勢 + 無強勢
1	Tú eres	de esta (2) eso un Porque es		compra y Ese amor (2) llega así (2) que ayer (2) te encuentro (2)
2				asómate a manteca y niño en
3	no hay	pa' eso que un	daré el	dame el si al algún
4			dejé enterrado está aguardando está esperando	me está (2) mi amor tengo aquí vuelv a aquí
5			sea *	alta y de amores noche estoy pensando en que al (2)
6	yo amo	me ha		y en (2)
7		y antes		
8		necesita un		y arriba (4)
9			va a	aquella estrella dormido en que a que allí
10				se está tendiendo en y el
11		Pamplona hemos (2)		de abril de enero media y
合計	3	11	6	41

*: 語内融合

一方で、表 3.5 は、母音分立を示す母音連鎖を抽出してまとめた表であるが、10 ケース全てが同一語内の母音連鎖であり、その内、曲番号 9 と 10 以外は、強勢音節が小節の 1 拍目に相当し、一方、曲番号 9 と 10 のケースは句末に生起する語であることから、母音融合の対象とならなかった

表 3.4 母音融合（無強勢音節＋無強勢音節）を生起する各音節が属する語の内訳
（丸括弧の中の数字は、2 回以上の生起回数を表す）

曲番号	内容語＋内容語	内容語＋機能語	機能語＋内容語	機能語＋機能語
1	Ese <i>amor</i> (2) llega <i>así</i> (2)	compra <i>y</i>	que <i>ayer</i> (2) te encuentro (2)	
2		manteca <i>y</i> miño <i>en</i>		asómate <i>a</i>
3			<i>si</i> algún	dame el
4	tengo <i>aquí</i> vuelva <i>aquí</i>		me está (2) <i>mi</i> amor	
5	noche <i>estoy</i>	alta <i>y</i> pensando <i>en</i>	de <i>amores</i>	que <i>al</i> (2)
6				<i>y</i> <i>en</i> (2)
8			<i>y</i> arriba (4)	
9	aquella <i>estrella</i>	dormido <i>en</i>	que <i>allí</i>	que <i>a</i>
10		tendiendo <i>en</i>	se <i>está</i>	<i>y</i> el
11		media <i>y</i>	de <i>abril</i> de <i>enero</i>	
合計	8	8	17	8

表 3.5 母音分立を示す母音連鎖
（丸括弧の中の数字は、2 回以上の生起回数を表す）

曲番号	強勢＋強勢	無強勢＋強勢	強勢＋無強勢	無強勢＋無強勢
1			bambolea (2) Bamboleo (2)	
2		traéis		
3		traer	creas día	
9			día	
10			río	
合計	0	2	8	0

と考えられる。

3.3 語末子音＋語頭母音による再音節化

図 3.3 は、語末子音＋語頭母音による再音節化の譜例である。“das” と “e-sa” の “e” 部分が [da.se] と再音節化されている。丸で囲まれた部分

E E7 Am

si tú me das e - sa miel

語末子音＋語頭母音

図 3.3 “Clavelitos” の譜例

(『歌』 p.10 より引用した楽譜の一部を筆者が編集したものである)

表 3.6 語末子音＋語頭母音による再音節化

(丸括弧の中の数字は、2 回以上の生起回数を表す)

曲番号	強勢＋強勢	無強勢＋強勢	強勢＋無強勢	無強勢＋無強勢
1		por eso (2)	Amor en Es imposible vivir así (2)	en el (2)
2		los ángeles	llevar al verás al Voy a	
3	des esa			colorados igual llevas en
6		el alto el hombre los abro		en el Gracias a
7	un hombre (2)			
9	hoy es	campanas este	él os seguid aquella	
10			ver a (2)	beben y (2) en el (3) vuelven a
11		con una (3)		
合計	4	10	11	12

が再音節化によって同一音節となる箇所を示している。この場合の再音節化は、母音の数に変更はないため、母音融合の場合とは異なり、音節数が減少することはない。

また、表 3.6 は、このタイプの再音節化の現象をそれぞれの曲ごとに抽出してまとめたものである。イタリック体の箇所が、再音節化によって同一音節となる。音群 (grupo fónico) 内における、再音節化が生起する「語末子音 + 語頭母音」の条件を満たす音声環境全てにおいて、再音節化が生起する結果となった。それぞれの強勢 / 無強勢音節の組み合わせのタイプ別に観察しても、あまり生起のしやすさには変わりはないように考えられる。

4. 教材としての利用法とまとめ

3 の分析結果から、語間母音融合が生起しやすい音声環境は、無強勢語である機能語の無強勢音節と強勢語である内容語の無強勢音節の組み合わせである傾向が示された。語内母音融合が生起しやすい音声環境については、小節の 1 拍目や句末に割り当てられないことが条件として考えられるが、ケース数が少ないため、さらに観察が必要である。一方で、「語末子音 + 語頭母音」の再音節化は、音群内では必ず生じる現象であると考えられる。

ゆえに、日本人スペイン語学習者にとって、Fernández *et al.* (2018) や Civit (2019) が指摘するように、単語間の繋がりを意識させ、日本語の発話に生起することのない再音節化の現象を留意させるための学習方法として、歌は最適な学習教材となりうると考えられる。しかしながら、吉田 (2014) は、アクセントについて未習の学習者では歌を用いた学習を行ったとしても、語アクセントの判別は難しいとしており、牧野 (2013) の学生が効果的と感じる英語発音トレーニングにおいては、歌を利用する際には、リズムや音の繋がりのインストラクションを行っている。

以上のことから、スペイン語のリズムに最も影響を与えられ

母音融合、及び再音節化を日本人スペイン語学習者に習得させるために歌を利用する際には、漠然と歌を流すだけでは効果はないと考えられる。音符と音節がほぼ1対1対応になっていること、その音節は再音節化されたものであるというインストラクションが必要になるはずである。そのためには、今回の分析に用いた教材から選択する場合、まず、Simpson (2015) が指摘するように、学習者が興味を持てるような歌教材の選択として、トゥナで演奏されるような1) 各年代にあった歌を選択し、寺内 (1992) が指摘するように、大ヒットした歌は、その歌詞とメロディーが上手に適応しており、よい発音教材になるという点を考慮すると、2) スペイン語圏で良く歌われてきた歌を選択し、3) ネイティブのプロの歌手による歌を聞かせ、歌詞の翻訳を行い、4) 歌詞と楽譜を比較することによって、再音節化された音節を確認し、音の繋がりを意識させ、それらがほぼ1音符に割り当てられていることを確認させた後、5) ネイティブの歌に合わせて歌うことによって、スペイン語のリズムに馴染ませていく、という方法が考えられるのではないだろうか。

今回提示した歌の利用法を日本人スペイン語学習者に試すことにより、日本語にないスペイン語の再音節化という韻律的特徴を習得する一助になるかどうかの検証を今後行っていきたいと考える。

謝 辞

本研究は、文部科学省科学研究費補助金・基礎研究 (c) (一般)「日本人スペイン語学習者の韻律に見られる諸問題と音楽を利用した発音指導」(課題番号 19K00865) の補助を受けてなされた研究の一部です。

参考文献

- 坂東省次, 堀田英夫編著 (2007)『スペイン語学小辞典』東京: 同学社.
- Civit Contra, Roger (2019) “Del Fonema a la Frase: Resilabificación en la Clase de Español Elemental”, *Kwansei Gakuin University Humanities Review* 23, pp.205-223.

- Fernández, Gisele, María Fernández y Takuya Kimura (2018) *AL OÍDO: CLAVES. Guía didáctica para el profesor*. Nagoya: Liberas Press.
- 木村琢也 (2019) 『響く音！ スペイン語』東京：朝日出版社.
- 木村琢也 (2021) 「スペイン語発音指導のためのオリジナル楽曲の作成 音節と強勢を重視して」『清泉女子大学教職課程紀要』第 5 号, pp.1-11.
- 窪蘭晴夫 (1999) 『日本語の音声』東京：岩波書店.
- 牧野眞貴 (2013) 「学生が効果的に感じる英語発音教育トレーニングの実践報告」『外国語フォーラム』第 12 号, pp.121-134.
- Moreno Fernández, Francisco (2002) *Prácticas de fonética española para hablantes de japonés* (『日本人のためのスペイン語発音教法』). Madrid: ARCO/LIBROS, S.L.
- 梨本貴志子 (2021) 「歌を教材として使った授業の実践」『The Basis : 武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要』11, pp.193-208.
- Nordqvist, Johan & Antje Stemme (Executive producer) (2002) *CANCIONES VOLUME I*. Minnesota: EMC/Paradigm Publishing.
- 高澤美由紀 (2020) 「スペイン語の歌における音節」『亜細亜大学学術文化紀要』第 36 号, pp.39-52.
- 高澤美由紀 (2021) 「スペイン語の再音節化についてのパイロットスタディ」『亜細亜大学学術文化紀要』第 39 号, pp.91-105.
- 寺崎英樹 (2017) 『発音・文字』東京：大学書林.
- 寺内弘子 (1992) 『歌って覚える日本語 補助教材としての歌』東京：凡人社
- 吉田千寿子 (2014) 「歌教材が日本語学習者の語アクセントの記憶に及ぼす影響」『名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究』第 22 号, pp.1-14.

閲覧 Web サイト

- Simpson, A. J. (2015) "How to Use Songs in the English Language Classroom", *Voices Magazine*, British Council. <https://www.britishcouncil.org/voices-magazine/how-use-songs-english-language-classroom> (2022 年 6 月 11 日閲覧)

注

- 1) アクセントについて未習の学習者が、歌教材の CD を聴いただけではアクセント型を判別できるようになることは難しいという言及もある (吉田 2014 : p.10)。
- 2) 母音融合には、語間母音融合 (synaloepha/sinalefa) と語内母音融合 (syner-

esis/sinéresis) があり、坂東、堀田 (2007) によれば、語間母音融合は、「母音で終わる語の次に母音で始まる語がきたときに、その2つの母音が融合して同一の音節の一部となること」であり、語内母音融合は、「語の内部において、規範的には二重母音ではなく母音分立 (hiato) を形成する2母音の連続 (ea, ao, oe など) または同一の母音の2連続 (aa, oo など) が、発音上二重母音または単母音となって同一の音節の一部となること」と定義される。また、寺崎 (2017 : p.74) では、「同じ音群を構成する語と語は、語の内部の音節構造と同じ原則に従って前の語の尾部と次の語の頭部が同音節的な結合として発音されることがある。これを再音節化 (resilabación, resilabeo) と言う」と定義し、語末母音 + 語頭母音からなる語間母音融合と語末子音 + 語頭母音をその例として挙げている。

- 3) この教材は、各曲の簡単な紹介と楽譜と歌詞のみから編纂されたもので、どのように用いるかのインストラクションは特に含まれていない。CD には、ネイティブスピーカーのプロの歌手によるものとインストゥルメンタルのみのものである2種類が、それぞれの曲において収録されている。
- 4) Simpson (2015) では、教材として用いる歌の選択の難しさについて指摘し、学習者の年齢も考慮すべき点として挙げている。本稿では、大学で第2外国語としてスペイン語を学ぶ20歳前後の学習者を対象としているため、子供の歌は分析から除外した。
- 5) スペインの大学のほぼ全ての学部にある独自の音楽隊で、お祭りに彩りを添えるために歌ったり、美しい女性に歌を歌ったりする音楽隊のことである。
- 6) この図では省略しているが、最後の小節は完全小節である。

アンドレス・ベリョ
『カスティーリャ語文法』 日本語訳 (6)

土 屋 亮

Translation in Japanese of Andrés Bello's
Gramática de la lengua castellana: Part 6

Ryo Tsuchiya

Abstract

The author has translated into Japanese with notes, so far, some chapters and paragraphs of the *Gramática de la lengua castellana destinada al uso de los americanos* (*Grammar of the Castilian language for the Americans' use*) written, originally in Spanish, by Andrés Bello (1781–1865), the Venezuelan humanist. This is the sixth article of this series. With regard to the reasons why the author is engaged in this translation, please refer to the abstract of his former publications, whose data can be found in the “Bibliographical references” section of the paper.

In this sixth article, the entirety of ‘Chapter 10: Gender of Nouns’ has been translated into Japanese. Annotations and points for discussion has been added when necessary.

序.

本稿は、1847 年に出版されたアンドレス・ベリョ (Andrés Bello 1781–1865) の *Gramática de la lengua castellana destinada al uso de los americanos* (『アメリカ大陸の人々の使用に向けたカスティーリャ語文法』、以下『カスティーリャ語文法』) の日本語訳の第 6 稿である。本稿では、原著の「第 10 章 実詞の性」を訳出する。なお、我々が用いている『カスティーリ

『語文法』の版の情報に関しては、本稿の註1を参照されたい。¹⁾また、本文中において、原文がやや分かりにくいと思われるときは、鉤括弧〔 〕に含まれる語句を、訳者の判断で補う。

第10章 実詞の性²⁾

160. 実詞の性を確定するためには、その意味にも、語尾にも着目しなければならない。意味により、男性となるものには、以下のようなものがある。

161. [第1] 人間の男、あるいは雄を意味する実詞、そして我々がこの性のものとして思い描く生命を持つもの [が男性である]。たとえば、*Dios* (神)、*ángel* (天使)、*duende* (悪魔・鬼)、*hombre* (男)、*patriarca* (族長、総大司教)、*tetrarca* (四分領主)、*monarca* (君主)、*león* (雄のライオン)、*centauro* (ケンタウルス)、*Calígula* (カリグラ帝)⁴⁾、*Rocinante* (ロシナンテ)⁵⁾、*Babieca* (バビエカ)⁶⁾ のように。なお、小型の馬を意味する *haca* ないし *jaca* という語は例外ではない。この実詞は、*zebra* (シマウマ)、*marmota* (マーモット)、*hacanea* (イギリス Hackney 産の馬・ハクニー)⁷⁾ のように通性実詞であり、この語尾の文法性に従うからである。

162. [第2] *el Magdalena* (マグダレナ川)⁸⁾、*el Sena* (セース川) のような河川を指す固有名詞や、たとえば *el Etna* (エトナ火山)⁹⁾、*los Alpes* (アルプス山脈)、*el Himalaya* (ヒマラヤ山脈) のように、山や山脈を指す固有名詞 [が男性である]。ただし、*la Alpujarra* (アルプハラ) と、*Sierramorena* (マーモット) や *la Silla* (シジャ山)¹¹⁾ のように元来女性の呼称名詞であったものは例外である。

163. [第3] 名詞自身として機能するあらゆる語ないし表現 [が男性であ

る]。たとえば、*las leyes de la naturaleza*（自然の法則）という語句を分析するならば、*la naturaleza*（自然）[という名詞]は前置詞 *de* の項として用いられている（*está empleado*¹²⁾）と言うであろう。ただし、このことは、*la en*、*la por*、*la pero* という言い方でもって、前置詞（*preposición*）や接続詞（*conjunción*）という語が暗黙に理解されることを妨げない。

次に、意味により、女性となるものには、以下のようなものがある。

164. [第1] 人間の女、あるいは雌を意味する実詞、そして我々がこの性のものとして思い描く生命を持つもの [が女性である]。たとえば、*diosa*（女神）、*ninfa*（ニンフ）、*hada*（妖精）、*leona*（雌のライオン）、*Safo*（サッフォ¹³⁾）、*Juno*（女神ユーノー¹⁴⁾）、*Dulcinea*（ドゥルシネア¹⁵⁾）、*Zapaquilda*（サパキルダ¹⁶⁾）のように。

165. [第2] 市町村に固有の名 [が女性である]。とはいえ、これらも語尾の性に従う場合がある。たとえば、*Sevilla*（セビリア）は意味と [-a という] 語尾が合致するため、当然女性である。しかし、*Toledo*（トレド）の場合は曖昧である。《*Pasado Toledo, a la ribera del mismo río (Tajo), está asentada Talavera*（トレドが通り過ぎていくと、同じタホ川の沿岸に、タラベラの町はある）》（*Mariana*）¹⁷⁾や《*Toledo permaneció libre hasta el 19 de diciembre, día en que le ocuparon los franceses*（トレドは12月19日まで独立を保ったが、その日、フランス人たちに占領された）》（*Alcalá Galiano*）¹⁸⁾に見られるように、[-o という] 語尾に従って男性扱いされる場合もあれば、《*Toda júbilo es hoy la gran Toledo*》（今日、この偉大なる全トレドこそが喜びである）（*Huerta*）¹⁹⁾のように、意味に従い、女性扱いされる場合もあるからである。

166. *Corinto*（コリント²⁰⁾）や *Sagunto*（サグント²¹⁾）、そして、その他の古代都市の名は、その語尾にかかわらず、ほぼ変化することなく、女性として

使われる。

167. [第3] 書記体系の区別にかかわらず、*la b* (bという文字)、*la o* (oという文字)、*la x* (xという文字)、*la delta* (δという文字)、*la ómicron* (οという文字) のような文字の名 [は女性である]。しかしながら、ギリシア語やヘブライ語の文字の名を男性扱いする者もなかにはおり、*delta* に関しては、スペイン王立アカデミーによれば、いくつかの河川が河口付近で形成する三角州を意味する場合には男性であるという²²⁾。

次に、語尾に着目した場合である。

168. [第1] *alma* (精神)、*lágrima* (涙) のように、強勢のない -a で終わる実詞は、一般に、女性である。[人としての] 男性の意味を有していることによって、[文法上の性が] 男性となる実詞は例外ではない。たとえば、*atalaya* や *vigía* (高所監視員)、*atleta* (運動選手)、*argonauta* (アオイガイ)²³⁾、*barba* (老け役の俳優)²⁴⁾、*consueta* (演劇のプロンプター)²⁵⁾、*cura* (司祭)、*vista* (税関の検査官) といった語のように。しかし、以下のような語は、この点において不規則であると見なければならない。すなわち、*espía* (スパイ)、*guía* (ガイド)、*lengua* (通訳)、*maula* (詐欺師) などのように、ある時は意味上の性に従い、またある時は語尾の性に従う曖昧な実詞である。とはいえ、疑う余地なく、これらの例においても、自然の性に従う文法性のほうが優勢である。なお、トランプの *sota* (J、ジャック) は、男の姿をしているが、つねに女性である。

また、以下の語も男性である。*cólera* (コレラ)、*contra* (反対意見)、*día* (日)、*hermafrodita* (両性具有者)、*mapa* (地図)、*planeta* (惑星)、*cometa* (彗星)、そして数多くの -ma で終わる語が男性であり、これらはギリシア語において、*emblema* (紋章)、*epigrama* (エピグラム・警句)、*poema* (詩歌)、*síntoma* (兆候) のように同じ語尾で終わる実詞である。したがって、

empireuma (焦臭)、*panorama* (展望・全景)、*cosmorama* (コズモラマ)、*diorama* (ジオラマ) のように、この語尾を有し、この言語由来のあらゆる新しい実詞を男性とするのをためらってはいけ²⁶⁾ない。しかしながら、慣用になって、*anatema* (破門制裁)、*neuma* (身体の動きや間投詞を用いた情動の表現)、*reuma* (リウマチ) は両性実詞²⁷⁾となり、*apostema* (膿瘍)、*asma* (喘息)、*broma* (冗談)、*diadema* (王冠・ティアラ)、*estratagema* (策略)、*fantasma* (物理現象のゴースト・多重像)、*flema* (粘液・痰)、*tema* (頑迷・執着) などの実詞については、女性実詞²⁸⁾となった。アメリカ大陸に住む四足動物の *llama* (リヤマ) は両性であるが²⁹⁾、多くの場合、男性である。

169. [第2] *vanidad* (空虚)、*merced* (恩寵)、*red* (網)、*sed* (喉の渇き)、*virtud* (美德) のように、-d で終わる語もまた女性である。ただし、*césped* (芝)、*ardid* (策略)、*almud* (アルムド)³⁰⁾、*alud* (雪崩)、*laúd* (リュート)³¹⁾、*ataúd* (棺)³²⁾、*sud* (南)、*talmud* (タルムード)³³⁾ は除く。

170. [第3] 強勢のない a を除くいずれの母音で終わる実詞も、また、d を除くいずれの子音で終わる実詞も男性である。とはいえ、例外は数多くある。ここでは、語尾の順に従い、[その例外の中でも] 最も際立つものを指摘するにとどめよう。

171. (a) 母音の e で終わる語の中でも、比喩や文法上または修辞上の技法を表す実詞は女性である。たとえば、*apócope* (語尾音消失)、*sinécdoque* (提喩)³⁴⁾ がそうである。ただし、*hipérbole* (誇張法) は両性であるので除く。³⁵⁾ また、数学上の線を表す名詞は、*elipse* (楕円)、*cicloide* (サイクロイド)、*tangente* (接線)、*secante* (割線)³⁶⁾ のように女性である。そして、*pirámide* (ピラミッド)、*clámide* (クラミス)³⁷⁾ のように、ギリシア語由来の -ide で終わる滑音³⁸⁾の実詞、*carie* (虫歯)、*sanie* (血液濃)、*temperie* (天候)、*superficie* (表面) のように、ie で終わり、この語尾の前の母音に強勢がある実詞。

そして、*lumbre* (火・光)、*muchedumbre* (群衆)、*pesadumbre* (重苦しさ・悲しみ)、*costumbre* (習慣) のように、*umbre* で終わる実詞。ただし、*alumbre* (ミョウバン) は除く。これまでに示した語に加え、以下の語が〔女性実詞に〕該当する。

³⁹⁾ <i>Alsine</i> (ルリハコベ)	<i>Ave</i> (鳥)
<i>Base</i> (基礎)	<i>Breve</i> (2 全音符) / <i>semibreve</i> (全音符)
<i>Calle</i> (通り)	<i>Carne</i> (肉)
<i>Catástrofe</i> (大災害)	<i>Clase</i> (種・階級)
<i>Clave</i> (鍵・手がかり、ただし「チェンバロ」を意味するときは男性)	
<i>Cohorte</i> (古代ローマの歩兵大隊)	
⁴⁰⁾ <i>Compage</i> (物事の結合・連続)	
<i>Consonante</i> (子音) / <i>licuante</i> (流音)	
<i>Corambre</i> (革・革袋)	<i>Corriente</i> (流れ・趨勢)
<i>Corte</i> (宮廷)	<i>Chinche</i> (南京虫)
<i>Egílope</i> (オニカラスムギ)	⁴¹⁾ <i>Elatine</i> (オオバコ科の植物)
<i>Eringe</i> (ヒゴタイサイコ属の植物)	⁴²⁾
<i>Escorpioide</i> (ツリシャクジョウ)	⁴³⁾
<i>Estacte</i> (ミルラ精油)	
<i>Estirpe</i> (血統)	<i>Estrige</i> (フクロウ)
<i>Extravagante</i> (教会法の中でも正則の外に置かれたもの、また、それを編纂したもの)	
<i>Falange</i> (指骨・趾骨)	<i>Falce</i> (円形の鎌)
<i>Faringe</i> (咽頭)	<i>Fase</i> (段階・フェーズ)
<i>Fe</i> (信仰)	<i>Fiebre</i> (熱・熱病)
<i>Frase</i> (文)	<i>Frente</i> (ひたい)
<i>Fuente</i> (泉・源)	<i>Gente</i> (人々)
<i>Hambre</i> (空腹・飢餓)	<i>Hélice</i> (プロペラ)

<i>Hipocrene</i> ⁴⁴⁾ (ヒッポクレネ)	<i>Hojaldre</i> ⁴⁵⁾ (パイ生地)
<i>Hueste</i> (軍隊・遠征軍)	<i>Índole</i> (性格・特徴)
<i>Ingle</i> (鼠径部)	<i>Jíride</i> (クサアヤメ)
<i>Labe</i> (汚れ・欠点)	<i>Landre</i> (リンパ腺の腫れ)
<i>Lápade</i> ⁴⁶⁾ (セイヨウカサガイ)	<i>Laringe</i> (喉頭)
<i>Laude</i> ⁴⁷⁾ (賛課)	<i>Leche</i> (ミルク・乳)
<i>Liebre</i> (野ウサギ)	<i>Liendre</i> (シラミの卵)
<i>Lite</i> (論争・訴訟)	<i>Llave</i> (鍵)
<i>Madre</i> (母)	<i>Mente</i> (精神)
<i>Mole</i> (巨体・大きな塊)	<i>Muerte</i> (死)
<i>Mugre</i> (油污れ・垢)	<i>Nave</i> (船)
<i>Nieve</i> (雪)	<i>Noche</i> (夜)
<i>Nube</i> (雲)	<i>Paraselene</i> (幻月)
<i>Parte</i> ⁴⁸⁾ (部分)	<i>Patente</i> (証明書)
<i>Pelitre</i> ⁴⁹⁾ (除虫菊)	<i>Pendiente</i> (坂・傾斜) ⁵⁰⁾
<i>Peste</i> (疫病・悪臭)	<i>Plebe</i> (庶民・平民)
<i>Pléyade</i> (著名な人たち)	<i>Podre</i> (腐敗・膿)
<i>Prole</i> (子供・子孫)	<i>Raigambre</i> (塊状の根)
<i>Salve</i> (聖母賛歌)	<i>Sangre</i> (血)
<i>Sede</i> (本部・教皇庁)	<i>Serpiente</i> (ヘビ)
<i>Sierpe</i> (ヘビ)	<i>Simiente</i> (種・種子)
<i>Sirte</i> (海や河川内の砂州)	<i>Suerte</i> (運命・幸運)
<i>Tarde</i> (午後)	<i>Tingle</i> (ガラス加工に使う道具)
<i>Torce</i> (ネックレスなどの首の一巻き)	
<i>Torre</i> (塔)	<i>Trabe</i> (建物の梁)
<i>Troje</i> (穀物倉)	<i>Ubre</i> (哺乳動物の乳房)
<i>Urdiambre</i> あるいは <i>urdimbre</i> (縦糸・筋立て)	
<i>Vacante</i> (欠員)	<i>Variante</i> (変種・異本)

Várice (静脈瘤)

Veste (衣服) / *sobreveste* (チュニック)

Vorágine (大きな渦)⁵¹⁾

172. (b) *Ceraste*⁵²⁾ (ツノクサリヘビ)、*dote* (素質・持参金)、*estambre*⁵³⁾ (長繊維の羊毛)、*lente* (レンズ)、*pringue* (脂汁・汚れ)、*puente* (橋)、*tilde* (ティルデ・強勢記号)、*tizne* (煤)、*trípode* (三脚) は両性である。しかし、*dote* は持参金を意味するときは、より一般的には女性である。逆に *estambre* においては、反対に、こんにち優勢なのは男性であって、このことは川にかかる橋を意味する際の *puente* においても同様である。*tilde* は文字の上に置かれる小さな記号の意味では両性であるが、一般に些細なものを意味するときは女性である。

173. (c) *arte* はふつう単数では男性として、複数では女性として使われる。⁵⁴⁾たとえば、Jovellanos に、《La naturaleza con sus nativas gracias vale más que ese arte metódico y amanerado (生来の恵みを有した自然は、その方法論的で型にはまった技術よりも価値がある)》や《La inmensa variedad de artes subalternas y auxiliares del grande arte de la agricultura (偉大なる農業技法の、多種多様な二次的かつ補助的技術)》といった例が見つかる一方で、《las artes liberales (自由七科)》、《las bellas artes (芸術)》、《las artes mecánicas (工芸)》や、《Se valió de malas artes para alcanzar lo que deseaba (彼は望んでいたものを得るため悪の技法(策略)を使った)》という言い方をする。しかし、[単数の] 自由科目や工業技術について取り上げる際、《La escritura fue arte poco vulgarizado o vulgarizada en la media edad (中世において、書記というのは、ほとんど大衆化していない技法であった)》のように、単数であっても女性となり得る。

174. (d) i または y で終わる語のうち女性であるのは、*graciadey*⁵⁵⁾ (オオバコ科の植物)、*palmacristi* (ヒマ・トウゴマ)、*grey* (家畜などの群れ)、*ley* (法

律) および、*metrópoli*⁵⁶⁾ (大都市) のように is で終わるギリシア語由来で滑音の全ての語である。

175. (e) j で終わる語の中では、*troj*⁵⁷⁾ (穀物倉) 以外に女性実詞はない。

176. (f) 語末が l となる語の中では、*cal* (石灰)、*capital* (首都)、*cárcel* (監獄)、*col* (キャベツ)、*cordal* (親知らず)、*credencial* (証明書)、*hiel* (胆汁)、*miel* (蜂蜜)、*pastoral* (牧歌)、*piel* (皮)、*señal* (しるし・標識)、*vocal* (母音) が女性である。*canal* は、海峡、運河・水路、人体の管、また比喩的に通信経路を意味するときに限って、男性である⁵⁸⁾。たとえば、*el canal de la Mancha* (イギリス海峡)、*el canal de Langüedoc* (ミディ運河)、*el de Maipo* (マイポの水路)⁵⁹⁾、*el canal intestinal* (腸)、*el canal por donde se recibió la noticia* (そのニュースを受け取った経路) のようにである。*moral* という語は、木の名前(クワ)としては男性であるが、人の言動がまっとうなものか、害悪なものであるかどうか判断される基準となる世の規則、道徳を意味するときには女性である。*sal* (食塩・塩) は、食塩を意味する際は、揺れの生じる余地なく女性であるが、化合物を意味する際にはこれを男性として扱う作家もいる。だが、それもしだいに稀になってきている。*amoníaco* (アンモニア) は男性実詞であるが、*amoníaco* / *amoníaca* のように「性の違いを区別できる」二つの語尾を有する形容詞としても用いられる。したがって、*sal amoníaco* (塩化アンモニウム) とも *sal amoníaca* とも言うことができるが、前者は性の異なる二つの実詞が同格で並び、後者は実詞と形容詞が一致している。

177. (g) 語末が n となる語の中では、カスティーリャ語またはラテン語の動詞から派生した *ión* の語尾を持つものが女性である。たとえば、*oración* (祈り・文)、*devoción* (信仰・崇拜)、*provisión* (貯え・供給)、*precisión* (明確さ)、*gestión* (管理・運営)、*reflexión* (熟考)、*religión* (宗教)、

rebelión (反逆) があてはまる。もし女性でなければ、動詞 *resbalo* から *resbalón* が、*empujo* から *empujón* が作られたのと同じ類推によって、*limpio* から *limpión* が作られたように、i で終わるカスティーリャ語の動詞の語根に *ón* を添加されて形成された語である。⁽⁶⁰⁾そして、カスティーリャ語の名詞や動詞から派生した、*zón* で終わる語も女性である。たとえば、*ramazón* (伐採後の枝)、*palazón* (木材)、*armazón* (フレーム・骨格)、*cargazón* (重苦しさ・重荷) といった語が挙げられよう。ただし、*lanzón* (太く短い槍) のように、示大語は除く。そして、*ación* (鎧革)、*clín* ないし *crin* (たてがみ)、*diasén* (センナから作られる下剤)、*imagen* (像・イメージ)、*razón* (理由)、*sartén* (フライパン)、*sazón* (味・好機)、*sién* (こめかみ) といった語は、女性である。*margin* (河岸・周辺部) は単数においては両性であるが、複数においては一般に女性である。⁽⁶²⁾*orden* は、たとえば、*el orden de los asientos* (座席の列)、*el orden natural* (自然の秩序)、*el orden público* (公共の規範) のように、ある全体を構成する部分の連続、列、規則性、配列を意味する時は男性である。また、*el orden de los carnívoros en la clase de los mamíferos* (哺乳類における肉食の類) のように、科学の術語体系における種の一分類を意味する時もやはり男性である。しかし、この語がその名の秘跡 [すなわち叙階] と、その異なる位階の各々を意味する場合には女性である。したがって、*la orden del subdiaconado* (副助祭職の地位)、*las órdenes mayores* (上級叙階) のように言う。また、戒律や命令の意味においてもやはり女性であり、*una real orden* (王からの勅令)、*las órdenes del ministro* (大臣からの命令) と言う。そして、ある教団や同業組合の規則や制度、またその団体そのものを意味する際も同様であって、*la orden de San Francisco* (聖フランシスコ会)、*las órdenes mendicantes* (托鉢修道会)、*las órdenes militares* (騎士修道会) と表現する。他方、*desorden* (無秩序・乱雑)、*fin* (終末・目的) はこんにちでは一貫して男性である。⁽⁶⁴⁾

178. (h) 語末がoとなる語の中では、*mano* (手)、*nao* (船)、*testudo* (亀甲状に連ねた盾) が女性である。⁶⁵⁾ *sinodo* (宗教会議) という語を女性として使うものもあるが、この運用はすでに稀になっている。ギリシア人たちが半島に与えていた一般の名である *quersoneso* は、*la Quersoneso Címbrica* (ユトランド半島) や *Táurica* (クリミア半島) などのように、私は女性として用いるべきと考えるし、詩人の Valbuena は *quersoneso* にこの性を与えていた。⁶⁶⁾ *pro* (賛成・利益) という語は、*el pro y el contra* (賛否・損益) や人口に膾炙した *buen pro te haga* (⁶⁷⁾ [食事をしている人に] たくさん召し上げれ) という言い回しにおいては男性であるが、*la pro común* および *la pro comunal* (公共の・共同体の利益) においては女性である。

179. (i) 語末がrとなる語の中では、*bezar* および *bezoar* (⁶⁸⁾ (反芻動物の胃石)、*flor* (花)、*labor* (労働)、*segur* (斧・鎌)、*zoster* (⁶⁹⁾ (帯状疱疹) が女性である。*mar* (海) は、これに実詞の *Océano* が連続するとき、地名形容詞の *Adriático* (アドリア海)、*Atlántico* (大西洋)、*Mediterráneo* (地中海)、*Báltico* (バルト海)、*Caspio* (カスピ海)、*Pacífico* (太平洋)、*Negro* (黒海)、*Blanco* (白海)、*Rojo* (紅海)、*Glacial* (北極海) などが連続する場合を除いて、両性である。この複合語である *bajamar* (干潮)、*pleamar* (満潮)、*estrellamar* (ヒトデ) は女性である。*azúcar* (砂糖) は両性である。*calor* (熱・暑さ)、*color* (色)、*sabor* (味) は、特に詩歌においては、女性としての扱いを完全に拒むものではない。⁷⁰⁾

180. (j) sで終わる語の中には、sisで終わる女性の実詞はかなり多くあり、これは同じ語尾で、かつ同じ性であるギリシア語の実詞に由来する。*antítesis* (アンチテーゼ)、*crisis* (危機)、*diátesis* (体質・素質)、*sintaxis* (統語・統辞論)、*tesis* (主張・テーゼ) がこれに該当しよう。しかしながら、一貫して男性の *Apocalipsis* (ヨハネの黙示録) と *Génesis* (創世記) や、両性となる *énfasis* (強調) や *análisis* (分析) のような例外がある。*iris* (虹・

虹彩)は、女神の固有名ではないとき、男性である⁷¹⁾。また、次に列挙する、*aguarrás* (テレピン油)、*bilis* (胆汁)、*colapiscis* (魚膠)、*lis* (アヤメ・ユリ)、*litis* (論争・訴訟)、*macis* (ナツメグの種皮)、*monospastos* (単滑車)、*polispastos* (組み合わせ滑車)、*mies* (熟した穀類)、*res* (家畜・肉)、*tos* (咳)、*venus* (美女・ビーナスの彫像)は女性であるが、*cutis* (皮膚)は両性である⁷²⁾。

181. (k) u で終わる語の中で女性であるのは、*tribu* (部族) である。

182. (l) 語末が x である語の中で女性であるのは、*ónix* (縞瑪瑙) と *sardónix* (紅縞瑪瑙) である。*fénix* (不死鳥) は、かつては女性であったが、すでに男性に転移している。

183. (m) z で終わる語の中では、*cerviz* (首筋)、*cicatriz* (傷跡)、*coz* (馬の脚の後ろ蹴り)、*cruz* (十字架)、*faz* (顔・表)、*haz* (表・表面)、*hez* (澱・かす)、*hoz* (鎌)、*lombriz* (ミミズ)、*luz* (光・灯り)、*matriz* (子宮・母型)、*nariz* (鼻)、*nuez* (クルミ)、*paz* (平和)、*perdiz* (ヤマウズラ)、*pez*⁷³⁾ (タール・松脂)、*pómez* (軽石)、*raíz* (根・根源)、*sobrepelliz* (聖職者の着る袖の長い白衣)、*tez* (肌・皮膚)、*vez* (度・回)、*voz* (声) に加え、*altivez* (横柄さ)、*niñez* (幼少期)、*sencillez* (容易・簡潔) のように派生によってできた抽象語はすべて女性である。*doblez* という語は、[人格に] 二面性があることという抽象的な性質を意味する場合には女性であるが、折り目を意味する場合には男性である。*prez* (栄光・榮譽) は両性である。

184. [第4] 語尾が as や des となっている複数の実詞は、一般に女性であり、それ以外 [の語尾で終わる語] は男性である。

185. (a) ただし、*los afueras* (郊外)、*los cercas* (美術における前景) は男

性であるので例外である。また、女性である、*cortes* (議会)、*creces* (成長・増加)、*fauces* (咽喉)、*llaes* (自在鉤)、*pares* (胎盤)、*partes* (人の知的・精神的側面)、*preces* (請願)、*testimoniales* (証拠書類)、*trébedes* (五徳) と、両性である *modales*⁷⁴⁾ (作法・マナー)、*puches* (小麦の粥) も例外となる。*fascas* ないし *haces* (束桿) は、[古代ローマで] リクトル (警士) が [執政官などの] 位の高い公職者の前で携帯した斧の付いた棒を意味する際、議論の余地なく、男性である。ところで、少なくとも私は、ラテン語の単語である *fascas* が、一般に使われる語でもないのに、何のためにカスティーリャ語において性を変えようとし、そして、一束の棒がリクトルたちの手に握られている時には女性であるのか、皆目見当がつかない。リクトルたち以外の手の中にある場合は男性であるというのに。⁷⁵⁾

186. [第5] 複合語のうち、語の後部が単純形を保った単数の実詞となっているものは、この元の実詞の性に従う。たとえば、*aguamiel* (サトウキビの搾り汁)、*contraveneno* (解毒剤)、*contrapeste* (ペストに対する時宜を得た対策)、*desazón* (不快感)、*disfavor* (失寵)、*sinrazón* (不正・不合理)、*sinsabor* (不愉快なこと・無味)、*trasluz* (透過光)、*trastienda* (店の奥) がそうである。⁷⁶⁾

187. (a) 女性である *aguachirle* (味や滋養のない飲み物) と *aguapié* (低品質ワイン) と、男性である *guardacostas* (沿岸警備艇)、*guardavela* (括帆索)、*tapaboca* (口への平手打ち) は例外である。⁷⁷⁾そして、これ以外の、動詞と実詞からなる複合語も同様の規則に従う傾向があり、先の [*guardacostas*、*guardavela*、*tapaboca* の] 三つのようなやり方で形成される。たとえば、*guardamano* (剣の鐔)、*pasamano* (手すり)、*mondadientes* (爪楊枝)、*cortaplumas* (ポケットナイフ) は男性である。しかし、*chotacabras* (ヨーロッパヨタカ)⁷⁸⁾、*guardapuerta* (ドアカーテン)、*guardarropa* (クローク・ワードローブ)、*portabandera* (旗竿を支えるベルト)、*portacarabina* (カービ

ン銃を入れる小さな革袋)、*sacafilásticas*(大砲の火門栓を引き出すための針金)、*tornaboda* (結婚式の翌日の祝祭)、*tornaguía* (受領証)、*tragaluz* (採光窓)⁷⁹⁾は女性で、*portaalmizcle* (ジャコウジカ)⁸⁰⁾と *portapaz* (宗教上のレリーフが施された板・プレート) は両性である。

(未了)

参考文献

- RAE y ASALE (2014) *Diccionario de la lengua española 23ª edición*, Espasa, Madrid.
- RAE y ASALE, *Nuevo tesoro lexicográfico de la lengua española* (<https://apps.rae.es/ntlle/SrvltGULoginNtllle> 最終閲覧日：2022年6月23日)
- 拙稿 (2007) 「アンドレス・ベリヨ『カスティーリャ語文法』日本語訳 (1)」*IBERIA* 8, pp.31-44、神戸市外国語大学大学院イスパニア語学・文学研究会。
- 拙稿 (2009) 「アンドレス・ベリヨ『カスティーリャ語文法』日本語訳 (2)」*IBERIA* 9, pp.97-117、神戸市外国語大学大学院イスパニア語学・文学研究会。
- 拙稿 (2010) 「アンドレス・ベリヨ『カスティーリャ語文法』日本語訳 (3)」*IBERIA* 10, pp.142-162、神戸市外国語大学大学院イスパニア語学・文学研究会。
- 拙稿 (2020a) 「スペイン語の名詞 *arte* の文法性について」『総合学術研究』36, pp.53-79、亜細亜大学総合学術文化学会。
- 拙稿 (2020b) 「アンドレス・ベリヨ『カスティーリャ語文法』日本語訳 (4)」『総合学術研究』37, pp.53-71、亜細亜大学総合学術文化学会。
- 拙稿 (2022) 「アンドレス・ベリヨ『カスティーリャ語文法』日本語訳 (5)」『総合学術研究』39, pp.107-129、亜細亜大学総合学術文化学会。

註

- 1) 我々がEdaf版と呼ぶのは、Bello, Andrés (1984) *Gramática de la lengua castellana*, EDAF, Madrid であり、pdf版はFundación Biblioteca Virtual Miguel de Cervantesが提供している版である。拙訳の(1)からこの二つの版を見ている。(pdf版はこちらから入手できる。<http://www.cervantesvirtual.com/servlet/SirveObras/0469492549910494157857/index.htm>)
- 2) この日本語訳では一貫して *sustantivo(s)* を「実詞」と訳している。
- 3) 領土の四分の一を治める領主。特に、帝政ローマの四分統治における正帝、副帝(東西の領土で二人ずつ)を指す。

- 4) ローマ帝国初代皇帝アウグストゥス（オクタウィアヌス）の曾孫にあたる、同帝国の第3代皇帝（37-41）。ラテン語表記で *caligula* とは「小さな軍靴」を意味し、元来女性名詞であるが、幼少期にこの軍靴を愛用したこの人物（男）を指すため男性実詞の扱いを受ける。
- 5) セルバンテスの小説『才智あふるる郷士ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ』（1605）の主人公ドン・キホーテが所有し、跨って共に旅をする駄馬の名。
- 6) 作者不詳の英雄叙事詩で12世紀後半に成立したとされる『わがシッドの歌』に登場する英雄シッドの愛馬の名。
- 7) ここに挙げられている *haca/jaca*, *zebra*, *marmota*, *hacanea* はいずれも語尾が -a で終わる典型的な女性実詞であるが、現実の指示対象である当該の生物が雄であっても、この呼び名しかないため、「通性」である。
- 8) コロンビアを南北に流れる河川の名。マグダラのマリア（Magdalena）にちなむという。
- 9) イタリアのシチリア島にある活火山。語末が -a で終わっているが、女性実詞ではない。
- 10) スペインの中南部、カスティーリャ・ラ・マンチャ州とアンダルシア州を隔てている山脈。Sierra Morena という表記が標準的である。「呼称名詞（apelativos）」という語については、第100節（拙稿（2020b）に収録）を参照。
- 11) ベネズエラにある山。スペイン語で「丘」を意味する *cerro* という語と共に、Cerro la Silla と呼ばれることもある。
- 12) *la naturaleza* は女性実詞であるので、「使われている」を意味する *empleado* という過去分詞は女性単数形の *empleada* になると想定されるわけだが、ここでは、「*la naturaleza* という語」のようにメタ的な使い方のことを言っており、この場合、男性実詞として使われるため、過去分詞も *empleado* になるという話である。
- 13) 古代ギリシアの女性詩人（紀元前7世紀-6世紀）。
- 14) ローマ神話に登場する女神。女性の婚姻、出産などを守護する。ヨーロッパの多くの言語で「6月」を表す語の由来となった（英：June、西：Junio）。
- 15) セルバンテスの小説『才智あふるる郷士ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ』（1605）に登場する主人公、ドン・キホーテことアロンソ・キハーノの思ひ姫の名。形容詞 *dulce* 「甘い」からの派生でできている。
- 16) スペインの劇作家 Lope de Vega（1562-1635）の叙事詩 *La gatomaquia* 『猫戦争』の登場人物（猫）の一人（一匹）。雌。
- 17) Juan de Mariana（1536-1624）、スペインの神学者、歴史家。
- 18) Antonio Alcalá Galiano（1789-1865）、スペインの政治家、作家。

- 19) Vicente García de la Huerta (1734-1787)、スペインの詩人、劇作家。この例の一節は、*Raquel* という作品中にある。
- 20) 古代ギリシア都市のコリントスを指す。
- 21) 紀元前 6 世紀ごろ、ローマ人たちの到達前に建設された都市サグントゥムを指す。現在のスペイン・バレンシア州にあるサグントにあたる。
- 22) これはそのとおりであるが、もはや文字の名ではなく、「デルタ」という語であると考えるべきであろう。
- 23) アオイガイ（葵貝）という名前だが、タコの仲間という。
- 24) ここでは「老け役俳優」という意味だが、「頬から顎にかけての髭」という意味の女性実詞として用いるほうが圧倒的に多い。
- 25) 我々が参照している pdf 版では *consuela* と誤って書かれているが、Edaf 版では正しく *consueta* と書かれている。本稿では、後者の正しい語を書いておく。
- 26) ここまでに出てきた *emblema*、*epigrama*、*poema*、*síntoma*、*empireuma*、*panorama*、*cosmorama*、*diorama* は現代スペイン語においても確かに男性実詞である。
- 27) 現代スペイン語においては、*anatoma* は男性、*neuma* はこの意味においては両性、*reuma* も確かに両性である。
- 28) *apostema*、*asma*、*broma*、*diadema*、*estratagema*、*fantasma*、*flema* のいずれも女性実詞であるが、*tema* は「頑迷・執着」という意味においてのみ女性として用いられる可能性があるに過ぎない。
- 29) 確かに DRAE 第 23 版（2014 年刊行）では “Era usado también como masculino”（かつては男性としても使用された）のタグが付いているが、現代では女性実詞である。
- 30) スペインでかつて使われた穀物や木の実、豆類を計量する単位。時代と地域によって基準が全く異なる。
- 31) 弦楽器の一つ。
- 32) 「南」の意。sur と言うのが通常だが、DRAE 第 23 版によれば、中米以南の国々で使われるという。
- 33) これでは例外のほうが多いぐらいで、規則として成立していないが、ここに挙げられた -d で終わる男性実詞のうち、他の言語に由来するものを除くと *césped* だけが残りの、段落内で列挙されているラテン語直系の語の中では、女性実詞である確率は高くなる。
- 34) 現在では女性実詞であるが、DRAE 第 23 版では “Era usado también como masculino”（かつては男性としても使用された）のタグが付いている。
- 35) ここでは *sustantivos*（実詞）ではなく *nombres*（名詞）と言っている。

- 36) 古代ギリシアの男性用衣装。
- 37) 「滑音」とは esdrújulos (語末から 3 番目の音節に強勢のある語) を指す。
- 38) 現代では、単複同形で *caries* として使われるのがふつうである。原文にも Cuervo による註がある。
- 39) *álsine* のように語頭の a に強勢がある。現代の正書法では、大文字であっても、アクセント記号を書く必要がある。
- 40) スペイン王立アカデミー (rae.es) がウェブ上で提供する *Nuevo tesoro lexicográfico* (過去のアカデミーの辞典類を横断的に検索できる) でこの語を検索すると、1992 年の辞典までは収録されているが、以降の辞典からは削除されている。
- 41) antirrhinum elatine を指す。
- 42) ガーデニング・園芸の分野では「エリンギウム」「エリンジウム」と呼ばれることが多い。
- 43) マメ科オウゴンハギ属の植物。
- 44) ギリシア神話に登場するヘリコーン山にある泉の名。
- 45) 男性実詞であるが、かつては女性としても用いられた。DRAE 第 23 版に “Era usado también como femenino” (かつては女性としても使用された) のタグが付いている。
- 46) 註 40 同様、*Nuevo tesoro lexicográfico* でこの語を検索すると、1989 年の辞典までは収録されているが、以降の辞典には見当たらない。現代では *lapa* という。
- 47) カトリック教会の聖務日課の一つ。
- 48) 原文の *que sólo es masculino cuando* significa aviso という説明のとおり、「報告書」を意味するときのみ、男性である。
- 49) この語は女性実詞ではなく男性実詞である。DRAE 第 23 版でも確認できる。
- 50) 「イヤリング」を意味するときは男性。原文にも *masculino, cuando significa adorno de las orejas* という説明がある。
- 51) ここに *En Chile se usan impropriamente como masculinos chinche, hambre, pirámide*。(chinche、hambre、pirámide はチリでは誤って男性として用いられる) という原註がある。
- 52) *ceraste* は男性実詞であり、ここに Cuervo による註がある。彼によれば、[Vicente] Salvá がアカデミーにならって、この語を自らの文法書内で男性実詞とし、Bello はこれに従ったのだという。
- 53) 現代では男性実詞だが、確かに DRAE 第 23 版には “Era usado también como femenino” (かつては女性としても使用された) のタグが付いている。

- 54) 本稿の筆者も *arte* については過去に調べたことがある。拙稿 (2020a) 参照。
- 55) *graciadey* そして *graciadei* も DRAE 第 23 版には収録されていない。
- 56) 語末が *is* となる語として、*metrópoli* が挙げられているが、この語は *metrópolis* のように *s* が付いた形でも単数として用いられる。
- 57) この語は *troja*、*troje* とも綴られる。
- 58) 現代では「運河・水路」の意味以外でも、男性として扱われることが多い。
- 59) チリの首都サンティアゴ・デ・チレを流れる水路。
- 60) したがって、*limpión* (清掃) は男性である。
- 61) DRAE 第 23 版では男性実詞であるが、*Nuevo tesoro lexicográfico* を用い、過去のアカデミアの辞書でこの語を調べると、1869 年刊行の第 11 版までは女性実詞として記述されている一方で、1884 年の第 12 版以降男性実詞になっている。なお、*sen* はマメ科ジャケツイバラ亜科の植物で、特にチンネベリセンナ、アレキサンドリアセンナを指し、この語も男性である。
- 62) *margen* という語は意味によって性が異なる。「河岸」の意味においては確かに男性・女性の両方があり得るが、「余白・マージン」という意味においては男性である。
- 63) 動植物の種の分類における「目 (もく)」を指す。
- 64) *fin* はかつて女性として用いられることもあった。
- 65) *testudo* は古代ローマにおける盾を用いた戦術の一つ。1843 年刊行の DRAE 第 9 版までは女性として扱われていたが、第 10 版以降は男性と記述され現代に至っている。
- 66) *Nuevo tesoro lexicográfico* で確認してみても、この語は一貫して男性であるが、これが “ ” を意味することから女性としする慣用があったのかもしれない。
- 67) *Cuervo* の註でも指摘されているが、より一般的なのは *pro* を女性実詞として扱う *buena pro te haga* である。
- 68) 現代では男性である。
- 69) この語もやはり現代では男性であり、強勢も *zóster* となっている。
- 70) いずれの語も現代においてはふつう男性扱いをするが、*calor* に関しては、DRAE 第 23 版の *calor* の項に *En Andalucía y algunos lugares de América, usado también como femenino* (アンダルシアとアメリカ大陸の諸地域で女性として使われることもある) というタグが付いている。
- 71) *Iris* でギリシア神話に登場する女神イーリスを意味する。この場合は女性実詞である。
- 72) これらの語の中で *aguarrás*、*monospastos* は男性であり、*monopastos* は

monopasto の形で DRAE 第 23 版に収録されている。*cutis* も男性であり、Usado menos como femenino (女性としては男性としてもよりも使われない) のタグがある。

- 73) *pez* は「生きている魚」をも意味するが、その場合は男性である。
- 74) 現代では男性であるが、DRAE 第 23 版に Era usado también como femenino plural (かつては女性複数としても用いられた) のタグがあるとおり、両性であった。
- 75) ここには Bello の価値判断が含まれている。ラテン語の *fascēs* (*fascis* の複数) は男性であったのに、カスティーリャ語ではそれを女性としている一方で、*fascēs* と同語源で二重語になっている *hacēs* (*haz* の複数) は男性である。したがって、リクトルたちが持つ棒の束 (= *fascēs*) は女性で、それ以外の者たちが持つ、通常の意味の棒の束 (= *hacēs*) は男性であり、そのような慣用が理解できないという訳である。
- 76) Cuervo は、*luz* が女性であるのに *trasluz* が男性であることを指摘しているが、これに *contrapeste* も付け加える必要がある。*peste* は女性であるが、この語は男性である。
- 77) Cuervo は *aguachirle* の *chirle* は実詞ではなく形容詞であるとしている。また、*aguapié* は DRAE 第 11 版 (1869 年) までは女性であるが、第 12 版 (1884 年) 以降、男性となっている。
- 78) ヨタカ目ヨタカ科の鳥。
- 79) *guardarropa* と *tragaluz* は男性である。
- 80) この語も、この語に含まれている *almizcle* (ジャコウ) も男性である。

亜細亜大学『学術文化紀要』刊行規程

(目的および名称)

1. 「亜細亜大学『総合学術文化学会』」会員（以下「会員」という）の研究成果を発表し、学術・文化の発展に寄与することを目的として、研究誌『学術文化紀要』（以下「本誌」という）を刊行する。
2. 上記研究成果とは、論文・研究ノート・書評ならびに資料等をいう。

(刊行)

3. 本誌の刊行は年2回とし、7月と1月に刊行する。

(投稿資格)

4. 本誌に研究成果を投稿する資格を有する者は、会員、非常勤講師（共通科目担当）、ならびに学外研究者・教育者とする。
5. 非常勤講師の場合は、会員の推薦を必要とし、編集委員会の議を経て、投稿を認める。
6. 学外研究者・教育者の場合は、会員との共同執筆の場合に限り、投稿資格を有するものとする。

(発行者)

7. 本誌の発行者は、「亜細亜大学『総合学術文化学会』」とする。

(投稿および掲載)

8. 本誌への投稿および掲載は、次のとおりとする。

(1) 和文投稿原稿の分量は、次のとおりとする。

論文：400字詰め原稿用紙40枚以内

研究ノート・書評・資料等：同上20枚以内

(2) 和文以外の言語による投稿の分量は、和文に準ずるものとする。

- (3) 投稿論文原稿については、本誌の質の維持・向上のため、査読審査を行うものとする。

査読の実施に関しては、別に定める「査読審査制度内規」によるものとする。

- (4) 原稿には、英文、その他の言語による題名およびローマ字表記による執筆者氏名を付記するものとする。
- (5) 原稿（書評、資料等を除く）には、英文、その他の言語による要旨 200 語程度を付するものとする。
- (6) 投稿論文原稿は、査読審査終了分から、順次、掲載可能最新号に掲載するものとする。
- (7) 資料原稿については、資料および本誌に掲載することの学問的意義を示す投稿者の意見を資料前文として記載するものとする。
- (8) 掲載原稿のゲラ校正は、原稿執筆者が行う。
- (9) 本誌に掲載された研究成果については、その抜き刷り 30 部を原稿執筆者に提供する。
- 30 部以上を希望する場合は、超過分の経費を原稿執筆者が負担する。
- (10) 投稿原稿の返却は行わない。
- (11) 本誌に掲載された研究成果についての質疑については、原稿執筆者において応ずるものとする。
- (12) 投稿原稿は、本誌の目的に照らして、編集委員の過半数が不適格と認めた場合には掲載しないものとする。

(原稿料)

9. 本誌掲載原稿の原稿料は支給しない。

(学術リポジトリ)

10. 本誌に掲載された学術論文等は、「亜細亜大学学術リポジトリ」へ登録し、公開するものとする。ただし、執筆者から、辞退の申し出があった学術論文等については、これを行わない。

(規程の改正)

11. 本規程の改正は、編集委員会の過半数の同意を得て行うものとする。

(実施)

12. 本規程は、平成 14 年 4 月 1 日より実施する。

平成 22 年 4 月改定

平成 23 年 11 月改定

平成 28 年 7 月改定

亜細亜大学『学術文化紀要』投稿要領

総合学術文化学会紀要編集委員会

1. 本誌に研究成果を投稿する資格を有する者は、会員、非常勤講師（共通科目担当）、ならびに学外研究者・教育者とする。非常勤講師の場合は、会員の推薦を必要とし、編集委員会の議を経て、投稿を認める。学外研究者・教育者の場合は、会員との共同執筆の場合に限り、投稿資格を有するものとする。
2. 投稿内容は、言語、情報、文化、体育、教育に関する論文・研究ノート・書評ならびに資料等とし、完結した未発表のものに限る。
3. 投稿論文原稿については、本誌の質の維持・向上のため、査読審査を行う。
4. 資料原稿については、資料および本誌に掲載することの学問的意義を示す投稿者の意見を資料前文（1000字程度）として記載する。
5. 原稿の掲載可否および掲載の時期は、編集委員会において決定する。
6. 投稿された原稿は返却しない。
7. 原稿は電子機器で作成するものとし、原則として和文原稿はA4判用紙に横書きで、全角40字×38行、和文以外の言語による原稿はA4判用紙に横書き、ダブルスペースで作成する。
8. 投稿の際は原稿2部と電子媒体（CDROM、USBメモリ等）を提出する。論文投稿の場合は、査読用のため2部の原稿のうち1部は著者名を削除すること。
9. 原稿の表題のページには論文・研究ノート・書評および資料等の区分を明記する。
10. 原稿の訂正が求められた場合、訂正済みの原稿1部とその電子媒体を提出する。ただし、訂正が軽微な場合は、原稿とその電子媒体を再提出

せず、校正の際に必要な訂正を行ってもよい。

11. 投稿者には抜き刷り 30 部を無料提供する。31 部以上希望する場合は追加分を投稿者の負担として増刷することができる。希望者は投稿時に追加部数を表題のページに朱記すること。
12. 投稿原稿の分量は原則として、論文の場合、A4 判用紙（横書きで全角 40 字×38 行）で 12 枚以内（図表、抄録、注などを含める）、研究ノートの場合、A4 判用紙（横書きで全角 40 字×38 行）で 6 枚以内（図表、抄録、注などを含める）、書評・資料等の場合、A4 判用紙（横書きで全角 40 字×38 行）で 6 枚以内（図表、注などを含める）とする。和文以外の言語による原稿の分量は上記和文原稿の場合に準ずる。
13. 原稿は白黒印刷されることを前提に作成する。学術的にカラー印刷が必要な場合は、カラー印刷の可否、印刷費用の負担等について編集委員会と協議を行う。
14. 欄外脚注は用いず、末尾注とする。
15. 挿図や写真（ポジに限る）は直接印刷できるような鮮明なものとする。
16. 原稿には、英文、その他の言語による題名およびローマ字表記による執筆者氏名を付記する。
17. 論文原稿と研究ノート原稿には、英文、その他の言語による 200 語程度の要旨を添える。日本語・英語以外の言語による原稿には、日本語あるいは英語による 1200 字程度の要約添付をお願いする。
18. 投稿原稿は、編集委員長に提出する。

平成 14 年 4 月制定

平成 15 年 12 月改定

平成 20 年 10 月改定

平成 21 年 10 月改定

平成 22 年 4 月改定

平成 25 年 6 月改定

平成 28 年 7 月改定

平成 30 年 6 月改定

亜細亜大学 総合学術文化学会会員名簿

(2022年9月 所属学部 五十音順)

学会会長：関口 勝

同副会長：松本 賢信

経営学部

浅野 麗
板垣 文彦
大山 岩根
小川 直之
鎌田 遵
小池 求
齊藤 洋
鹿内 菜穂
清水 淳
関口 勝
原 仁司
堀 玄
三門 準

経済学部

一山 稔之
大森 克徳
奥井 智之
金 廷珉
杉湖 忠基
立尾 真士
土屋 亮
長浜 尚史
藤村 希
吉田 律

法学部

池田 明子
稲本 唯史
今津 敏晃
菊池 久一
佐藤 知乃
高澤美由紀
長田 秀一
堀内 昌一
松本 賢信
三浦 朋子
八谷 舞

国際関係学部

青山 治世
安形 輝
池亀 直子
大野 亮司
金 賢貞
小竹 直子
ターバーフィールド, ピーター
田部井圭子
千波 玲子
東浦 拓郎
ブルックス, ミキオ

都市創造学部

石田 幸生
スカウテン, アンドリュー

執筆者紹介（執筆順）

清水 淳 経営学部准教授（日本語学、日本語教育学）
高澤 美由紀 法学部准教授（音声学、スペイン語教育）
土屋 亮 経済学部准教授（スペイン語学）

編集委員（五十音順 ○印委員長）

安形 輝 国際関係学部教授
小池 求 経営学部講師
鹿内 菜穂 経営学部准教授
関口 勝 経営学部教授
ブルックス, ミキオ 国際関係学部准教授
○松本 賢信 法学部教授

亜細亜大学学術文化紀要 第40号（2022）

ISSN 2436-9411（オンライン）

2022年9月30日 発行

編集者 亜細亜大学総合学術文化学会

発行者 亜細亜大学総合学術文化学会

製作者 株式会社 南窓社

発行所 〒180-8629 東京都武蔵野市境5丁目8番 ☎(0422) 54-3111 亜細亜大学